

多賀城市文化財調査報告書第19集

高崎遺跡調査報告書

— 中央公園関連調査報告 —

平成元年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

高崎遺跡調査報告書

— 中央公園関連調査報告 —

序

多賀城市は、仙台市に隣接しているため近年いちじるしく人口が増加しております。当市は市政施行以来、「史跡の町、多賀城」をスローガンに史跡の整備に努めてまいりました。開発と史跡の保護は互いに相反するものであります。それを見事に調和することができたのは市民の皆様の文化財に対する御理解のたまものであると考えております。

今回発掘調査が実施された高崎遺跡は、中央公園建設にともなうものであります。発見された遺構、遺物には奈良・平安時代頃の建物跡、合口甕棺などがあり、多賀城跡を取り巻く集落を研究する上で貴重な資料となるものと思われます。

本報告が多少なりとも市民の文化財に対する啓蒙の一助となれば幸いです。

平成元年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長名取恒郎

例　　言

1. 本書は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが中央公園建設工事に伴い、実施した「高崎遺跡発掘調査」の結果をまとめたものである。
2. 本調査は、高崎遺跡の第7次発掘調査にあたり、「T S-7」の略称を用いて記録している。なお、多賀城市教育委員会によって、今までに実施された各調査については、調査年度の順に第1次から第6次発掘調査とした。
3. 本書の執筆・編集は、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て、高倉敏明が担当し、図版作成は千葉孝弥、石川俊英の協力を受けた。
4. 遺物の整理、実測は佐藤智雄を中心となって行い、佐藤悦子、柏倉霜代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子の協力を得た。
5. 調査区の実測基準線は、国家座標の方位をとっている。
6. 土層の色調については、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄:1976)を使用した。
7. 調査、整理に関する諸記録及び出土遺物は、埋蔵文化財調査センターが一括保存している。
8. 付編として昭和60年に実施した「高崎遺跡第4次調査」結果報告を掲載した。執筆・編集は、石川俊英が担当した。

調　　査　　要　　項

1. 遺跡所在地：宮城県多賀城市高崎一丁目21
2. 調査期間：昭和63年11月21日～平成元年1月25日
3. 調査面積：1,220m²
4. 調査主体者：多賀城市教育委員会 教育長 櫻井 茂男
5. 調査担当者：多賀城市埋蔵文化財調査センター
 - 所　　長　　名取恒郎（兼務）
 - 主任研究員　　高倉敏明（S. 63.10）
 - 技　　師　　石川俊英、千葉孝弥、石本 敬、相沢清利
 - 嘱　　託　　鈴木久夫、滝川ちかこ
6. 調査協力者：多賀城市都市計画課
7. 調査参加者：佐藤智雄、安斎幸男、遠藤 真、加藤寿舎、佐藤信次郎、鈴木次郎、鈴木忠三郎、山家幸男、若林 猛、阿部美津子、赤間かつ子、井川温子、遠藤一代、小野玉乃、小野寺恵子、青木とめの、木村梅子、熊谷好子、後藤恵子、渋谷てるよ、角田静子、平山節子、渡辺園恵

目 次

序 文	
例 言	
調査要項	
I. 遺跡の立地と環境	1
II. 調査に至る経緯	3
III. 調査経過	5
IV. 調査成果	7
1. 古代の遺構と遺物	7
2. 近世の遺構と遺物	17
V. 考 察	37
1. 古代の遺構について	37
2. 近世の遺構について	39

(付編)

高崎遺跡第4次調査報告

調査要項

I. 調査に至る経緯と経過	51
II. 発見遺構と遺物	51
III. まとめ	53

I 遺跡の立地と環境

高崎遺跡は、多賀城市の中央部に立地し、留ヶ谷から東田中にわたって広範囲に所在する遺跡である。遺跡が所在する高崎丘陵は、海拔23mから8mと西方に行くに従って低くなり北と南から細い谷が入り込んで、舌状の地形をつくり出している。この丘陵の北側と南側にはJR東北本線、仙石線が走り、西側の低湿地には砂押川が南下して丘陵を取り巻くように市街地を貫流している。丘陵上は、住宅地として良好な条件を有しているため遺跡の南側から東側にかけて住宅化されており、丘陵としての自然環境を維持しているのは、遺跡の中心部に所在している多賀城廃寺跡周辺の地域に限られている。

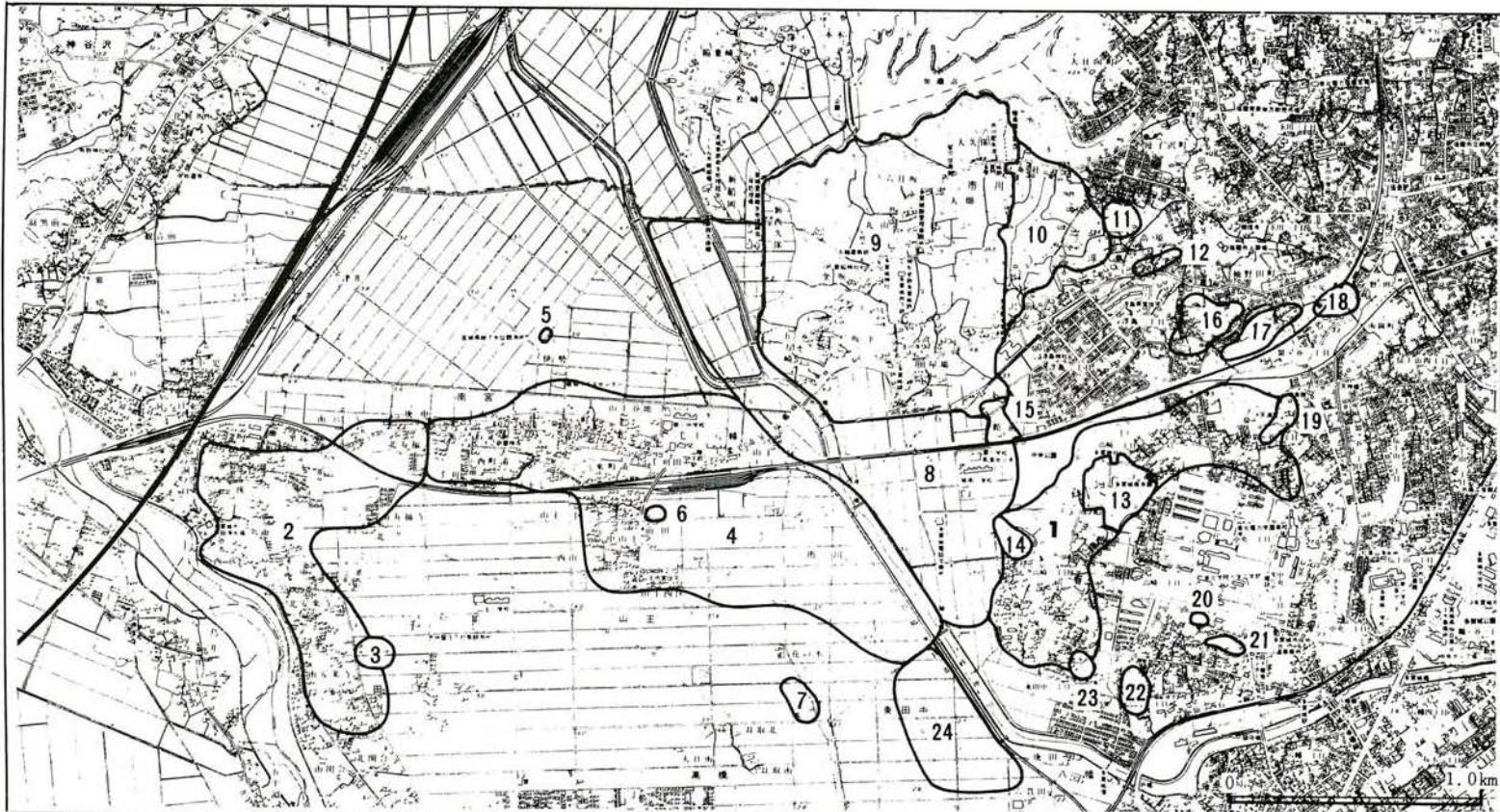
この高崎丘陵上には、旧石器時代から近世にかけての数多くの遺跡が所在している。丘陵南端部の東田中地区に本市最古の遺跡である志引遺跡がある。昭和59年の発掘調査によって10万年前とみられる¹⁾旧石器が発見され、数少ない海岸部の旧石器時代の遺跡として注目されている。

また、丘陵中央部の東北学院大学工学部の敷地内には、横穴式石室をもつ稻荷殿古墳がある。この古墳は径約13.5m、高さ約2mの円墳で石室内から銀環、小玉、横瓶が出土しており7世紀代の古墳²⁾と考えられる。さらに、丘陵西端部の舌状に張り出す低丘陵上に丸山団古墳群が立地している。1号墳は径35m、高さ7~8mの規模をもつが未調査であるため詳細は不明である。高崎遺跡の中央部には多賀城の付属寺院である多賀城廃寺跡が所在している。廃寺跡は、昭和36年から発掘調査が行われ塔、金堂、講堂、僧房、門などの主要伽藍が調査されて、学術的価値が再確認されたが寺院の寺域は明確ではなく、関連施設が周辺丘陵部上に存在するものと考えられる。

廃寺跡の北東約600mの丘陵北斜面から裾部にかけて、留ヶ谷遺跡がある。この遺跡は、昭和60年度の発掘調査によって確認されたもので、それ以前は遺跡の一部が高崎遺跡内に含まれていたものである。60・61年度の調査の結果、丘陵斜面に土壘・空堀を築き、丘陵裾部に整地地業をして建物を配した近世の武士の屋敷跡であることが明らかとなった。このように、高崎丘陵は、本市の中でも遺跡の過密地帯となっている。

一方、高崎遺跡周辺部についてみると、丘陵の西方に広がる低湿地域から砂押川西岸の自然堤防上にかけて高平遺跡、市川橋遺跡、山王遺跡が所在しており、古墳時代から近世にわたる集落の一部がこれまでの調査によって明らかになっている。特に、北側丘陵に立地する多賀城跡と同時代の遺構は、陸奥国府多賀城に関連する内容を有しており、次第に周辺部のようすが解明されて来ている。

今回発掘調査を実施した場所は、廃寺跡の西方約200mの高崎遺跡西端部、海拔約10mの北に細長く張り出す舌状の丘陵部である。



遺跡番号	遺跡名	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	高崎遺跡	集落跡・館跡	奈良・平安・中世	9	特別史跡多賀城跡	國府跡	奈良・平安・中世	17	野田館跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
2	新田遺跡	集落跡	古墳時代	10	西沢遺跡	散布地	奈良・平安・中世	18	矢作ヶヶ谷館跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
3	安樂寺遺跡	寺院跡	古墳時代	11	法性院遺跡	散佈地	奈良・平安・中世	19	留ヶ谷館跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
4	山王遺跡	村落	古墳時代	12	高原遺跡	散佈地	奈良・平安・中世	20	縄荷殿古墳跡	高塚古墳(円)	古墳(後)
5	内館跡	館跡	古墳時代	13	特別史跡多賀城鹿鳴寺跡	寺院跡	奈良・良良・平安	21	桜井館跡	高塚古墳(円)	中世
6	山地田遺跡	館跡	中世	14	丸山圍古墳群	高塚古墳(円)	奈良・古墳	22	志引遺跡	包含地・館跡	旧石器・奈良~中世
7	大日北遺跡	散布地	奈良・平安	15	館前遺跡	官衙・館跡	奈良・平安	23	東田中窪前遺跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
8	市川橋遺跡	集落跡・水田跡	奈良・平安	16	小沢原遺跡	散布地	奈良・平安	24	六貫田遺跡	散布地	奈良・平安

第1図 遺跡分布図（遺跡地名表）

II 調査に至る経緯

中央公園計画に係る協議経緯

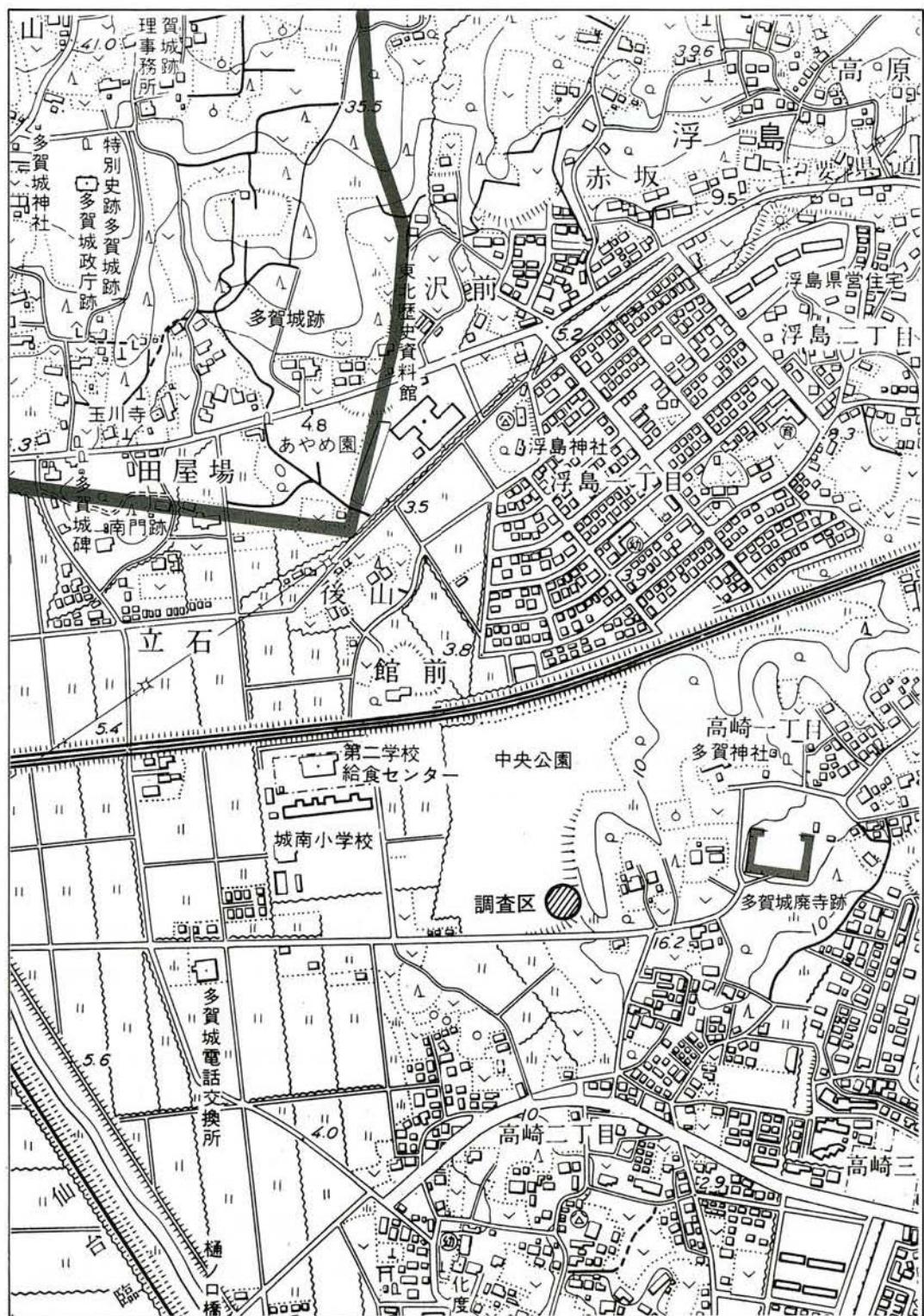
中央公園計画地は、本市のほぼ中央に位置する高崎地区の特別史跡多賀城廃寺跡から北西部の丘陵部と低湿地部まで、およそ137,000 m²に及ぶ広い面積を有するもので、この計画地内に多賀城廃寺跡も含まれていた。中央公園基本計画が昭和53年に作成され、都市計画課から翌年3月に「埋蔵文化財の発掘通知」が提出されたことから、文化財と都市計画サイドとの打ち合せが始まった。

中央公園計画の主な施設としては陸上競技場（400m トラック）、野球場、テニスコート、駐車場などで、これらの施設計画は特別史跡と地つづきの丘陵部と沢を削平、盛土して行う計画とされているため、文化財サイドとしては本計画について計画内容の変更を要望した。その後、数回にわたって協議が行われ、昭和54年11月に都市計画課から施設移動の案（第2案）が提出された。第2案は、丘陵削平部分を極力少なくしたもので、削平部分について遺構確認調査を実施し、調査の結果重要な遺構が発見された際は施設の変更を考慮されるよう申し入れを行って発掘調査の計画に入った。

発掘調査は、2ヶ年継続事業として昭和55年10月に第1次調査をスタートした。そして、昭和56年4月から第2次調査を行った。その結果、第1次調査を実施した西側丘陵部から合口甕棺等の古代の遺構が発見され、同丘陵上には、廃寺跡等に関連する遺構の存在が想定された。そのため、県は遺構が発見されなかった北側丘陵部の削平はやむを得ないが、合口甕棺が発見された西側丘陵は、遺跡の立地景観上からも削平することは好ましくないので、施設内容の見直しを行うよう要望してきた。

昭和56年12月、都市計画課は中央公園の事業計画について、施設については第2案で計画する旨の協議文書を教育長あて提出した。これに対して市教育委員会は、特別史跡多賀城廃寺跡の景観保護上周辺の丘陵を保護することが重要であるため、施設の位置、工法等について重ねて検討されるよう要望するとともに、工事の実施に当たっては再度協議されたいとする旨の回答文書を提出した。この時点で本計画については、一応第2案で計画されることで両者合意していたのである。

しかし、昭和61年に至って再度中央公園計画が具体化してきたため、都市計画課から提示された施設配置計画案（第3案）について県文化財保護課、多賀城跡調査研究所と協議を行った。その結果、施設がかかる西側丘陵部については、事前に発掘調査を実施することなどを確認して本調査に踏み切った。



第2図 調査区位置図

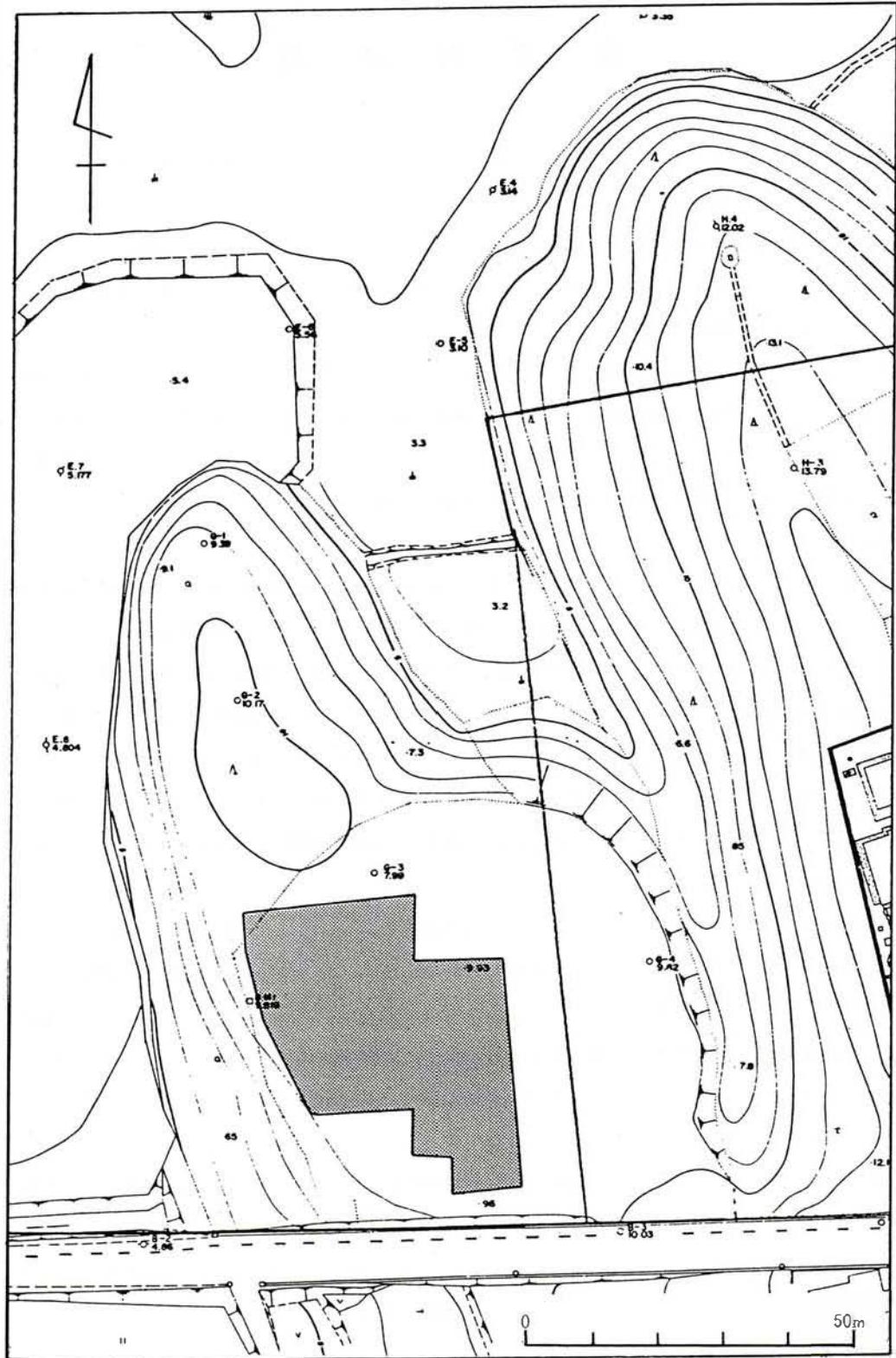
III 調査経過

発掘調査は、削平される丘陵上の平坦部分約1,200m²を対象として実施した。調査区の大部分は、中央公園の駐車場として盛土整地されているため、まずバックフォーとブルトーザーで盛土の排土作業から始める。調査区東側の盛土が厚いため、思ったよりも手間取る。しかし、排土作業3日目で南東部に大形の柱穴を確認し、柱列の検出を急ぐ。その結果、調査区内で南北に並んで4基の柱穴を発見した。柱穴は、一辺1m程度の規模で柱間寸法はおよそ10尺と想定された。この建物跡は、東側で調査区外へ延びるため調査区を拡張する。11月29日から発掘作業員が入って本格的な調査作業を始める。調査区南側から遺構上面に堆積の暗青灰色土(1層)の剥離作業を行い、2層面上で東西、南北に走る溝を検出した。南半部の遺構検出作業と溝、土壙、小柱穴建物跡の掘込みに入る。2層面上で検出した溝は、土壙に接続していることを確認した(12月1日)。

調査区北側に堆積している茶褐色土(3層)の掘込み、古代の建物跡(SB201)の柱穴掘込みを行う。さらに、昭和55年の調査で発見して埋め戻していた合口甕棺の再調査を行い、8年ぶりに甕棺と対面する(12月5日)。12月5日から佐藤智雄君が調査に加わる。合口甕棺の調査、SB201建物跡とその周辺部の遺構検出作業を並行して進める。また、調査区北側の3層の掘込み作業中に寛永通宝を発見する。さらに、カワラケが1ヶ所からまとまって発見された。カワラケは10個体が南北に並んでおり、そのうちの2個体に墨書が認められ、寛永通宝5点が共伴することから地鎮遺構と考えられた(12月9日)。調査区に国家座標杭を設定する(X:-189.160 Y:14,440)。

調査区全体の遺構検出作業を行い、小柱穴建物跡の調査、土壙、溝跡の掘込みを行う。12月12日NHKテレビの取材があり、夕方6時に放映される。合口甕棺、地鎮遺構の写真撮影、図面作成を行う。16日朝積雪のため雪かきをしながら調査を続行する。調査区中央部北側に検出した東西溝と切り合いをもつ土壙(SK217)の調査、布堀り溝の掘り込みを行う(12月20日)。遺構平面図作成を始める。並行して溝跡、土壙の掘り込みを行いセクション図作成、遺物の取り上げを行い年末休暇のため調査を中断した(12月27日)。

新年を迎え1月9日から調査を再開する。調査区南東部で検出した東西2間、南北4間のSB201建物跡の柱穴断ち割り、小柱穴建物跡の調査を行う。東側拡張部の北東隅で検出していた大形柱穴3基の調査を行い、それぞれのセクション図を作成する(1月14日)。調査区全体の清掃を行い、リモコンヘリコプターによる航空写真撮影を実施する。SB201・202建物跡の図面作成、遺構のレベルを測定し調査を終了した(1月25日)。



第3図 調査区域図

IV 調査成績

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡10棟、土壙11基、溝跡11条、合口甕棺1基、地鎮遺構1基、多数の小ピットである。これらの遺構は、古代に属するものと近世に属するものに分けられるので、時代ごとに分けて記述することにしたい。

1 古代の遺構と遺物

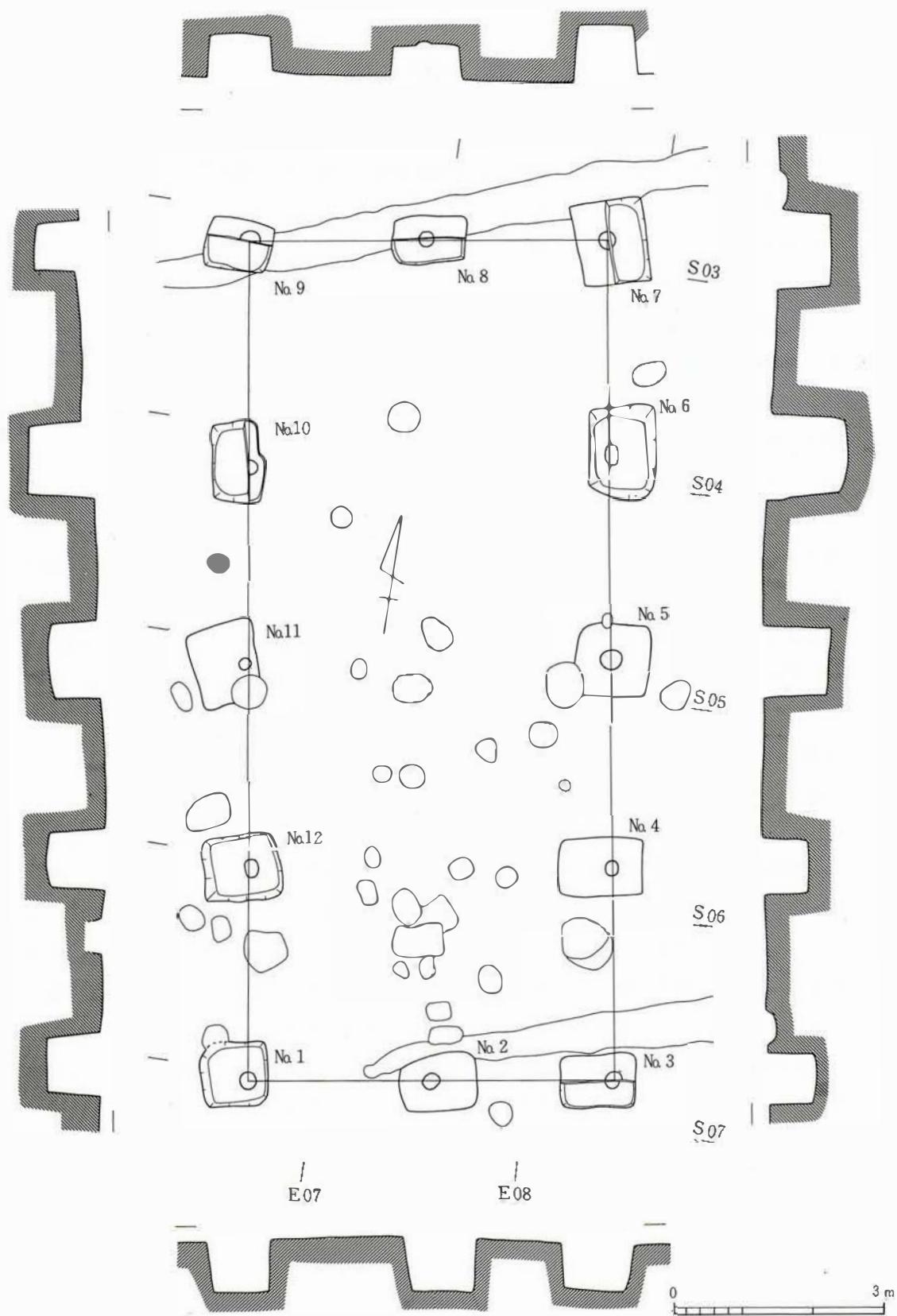
(1) 掘立柱建物跡

S B 201 掘立柱建物跡 調査区の南東部に検出された桁行4間、梁行2間の南北棟建物跡である。柱穴は、平面形が方形あるいは長方形を呈し、規模の大きいもので長辺120cm、短辺80cm、小さいものでも長辺94cm、短辺72cmを計り全体的に大形の柱穴の規模を有する。壁はほぼ垂直に掘られている。深さは最も深いもので112cmを有するものがあるが、平均すると70~80cmのものが多い。柱痕跡は全ての柱穴に検出されており、径20~28cmである。西側柱列の南から1番目と東側柱列の北から2番目の柱穴に柱切取り穴とみられる土層を観察している。柱穴埋土は5~10cmの厚さの版築状を呈し、褐色の粘質土と地山の凝灰岩ブロックや粒との互層になっている。柱間寸法は、東側柱列で南から297cm・295cm・286cm・302cmで総長1180cmを計り、西側柱列では南から295cm・292cm・276cm・312cmで総長1175cmを計る。また、南妻列では西から260cm・258cmで総長518cm、北妻柱列では西から250cm・252cmで総長502cmを計る。

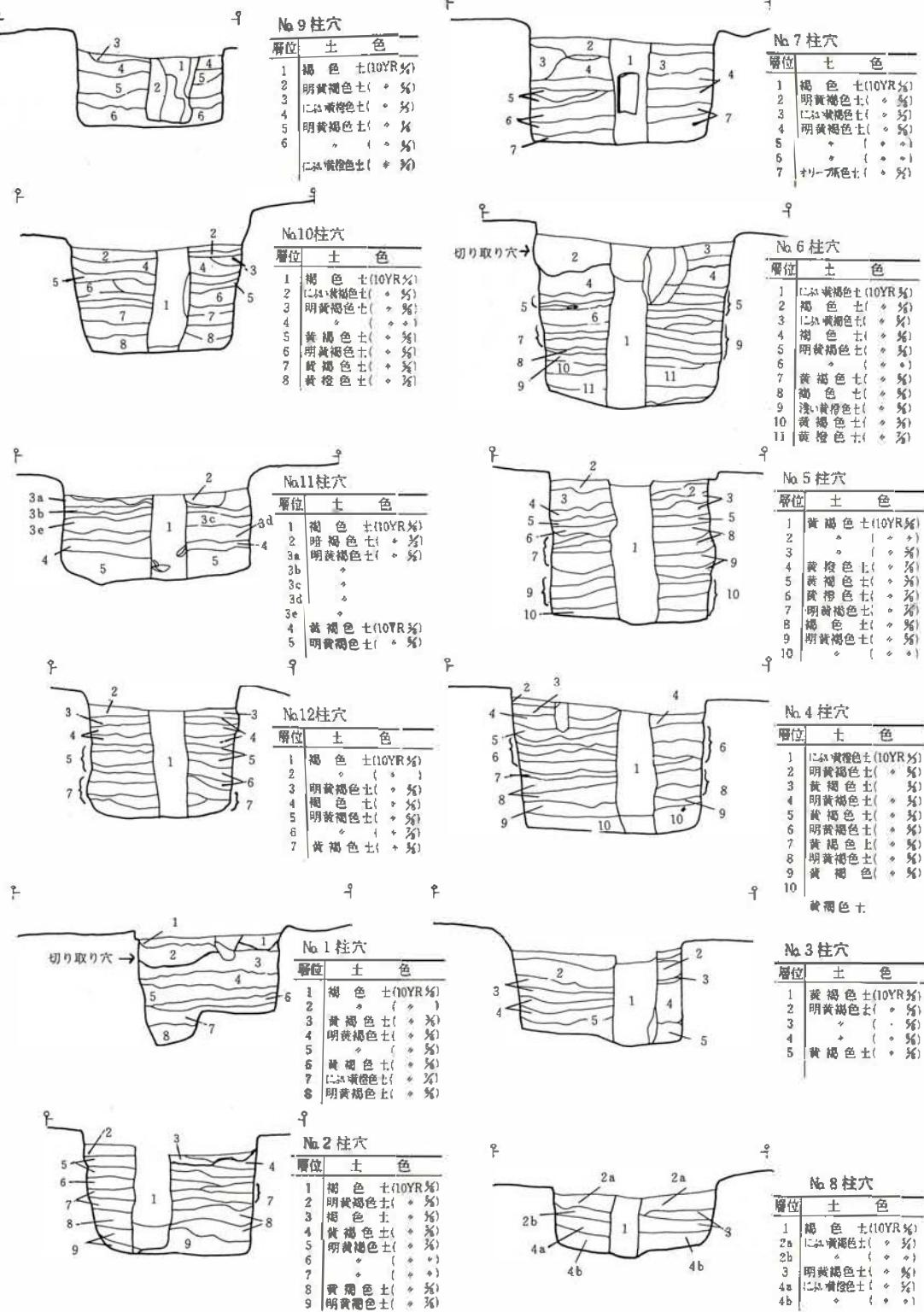
出土遺物としては、No.7柱穴の柱痕跡内から丸瓦が一個体出土しているだけである。

S B 202 掘立柱建物跡 調査区の北東隅部に検出されたものであるが、柱穴3基だけであるため建物の規模等詳細は不明である。柱穴は、丘陵の東斜面の一段低くなったところから南北に一列に並んで発見された。その東側はさらに傾斜して丘陵の北から南に入り込む狭い谷になっている。柱穴の平面形は、3基とも方形を呈し一辺90~110cmを計る。深さは100~120cmを有し、壁はほぼ垂直に掘られている。柱穴にはそれぞれ円形の切取りしたと観られる土壙があり、その土壙の下に柱痕跡が検出されている。柱は径28~30cmである。埋土は褐色の粘質土と地山の凝灰岩ブロックを含む砂質土との互層になっており、切取り穴には凝灰岩粒を含む褐色の粘質土で埋められている。柱間寸法は北から210cm・210cmと等間隔を計る。

出土遺物は、3基の柱穴とも切取り穴から土器片と瓦が出土している。



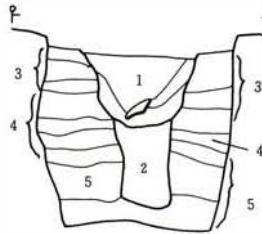
第4図 SB 201 建物跡



第5図 SB 201 建物跡柱穴断面図

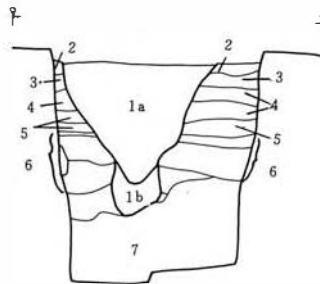
0 1m

E08



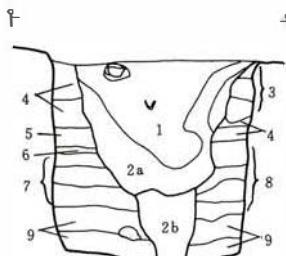
No. 3 柱穴

層位	土色
1	黄褐色土(10YR 5%
2	にね黄褐色土(5%
3	灰オリーブ色土(7.5YR 5%
4	" (5%
5	綠灰色土(5G 5%)



No. 2 柱穴

層位	土色
1a	にね黄褐色土(10YR 5%)
1b	" (5%)
2	" (5%)
3	にね黄褐色土(5%)
4	" (5%)
5	明黄褐色土(5%)
6	灰白色土(10Y 5%)
7	オリーブ灰色土(10Y 5%)

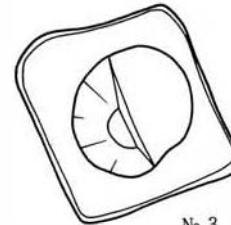


No. 1 柱穴

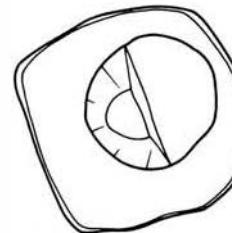
層位	土色
1	にね黄褐色土(10YR 5%)
2a	灰黃褐色(5%)
2b	" (5%)
3	にね黄褐色土(5%)
4	灰黃褐色土(5%)
5	オリーブ灰色土(7.5Y 5%)
6	にね黄褐色土(10YR 5%)
7	オリーブ灰色土(10Y 5%)
8	にね黄褐色土(10YR 5%)
9	綠灰色土(5G 5%)



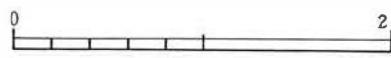
第6図 SB 202建物跡



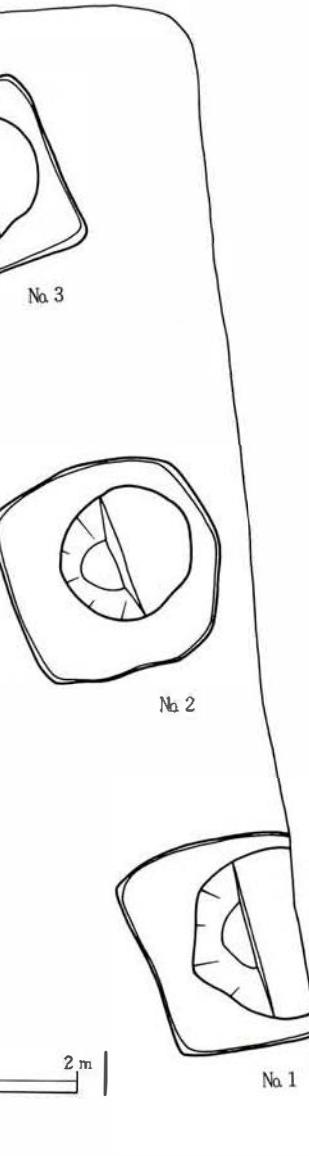
No. 3



No. 2

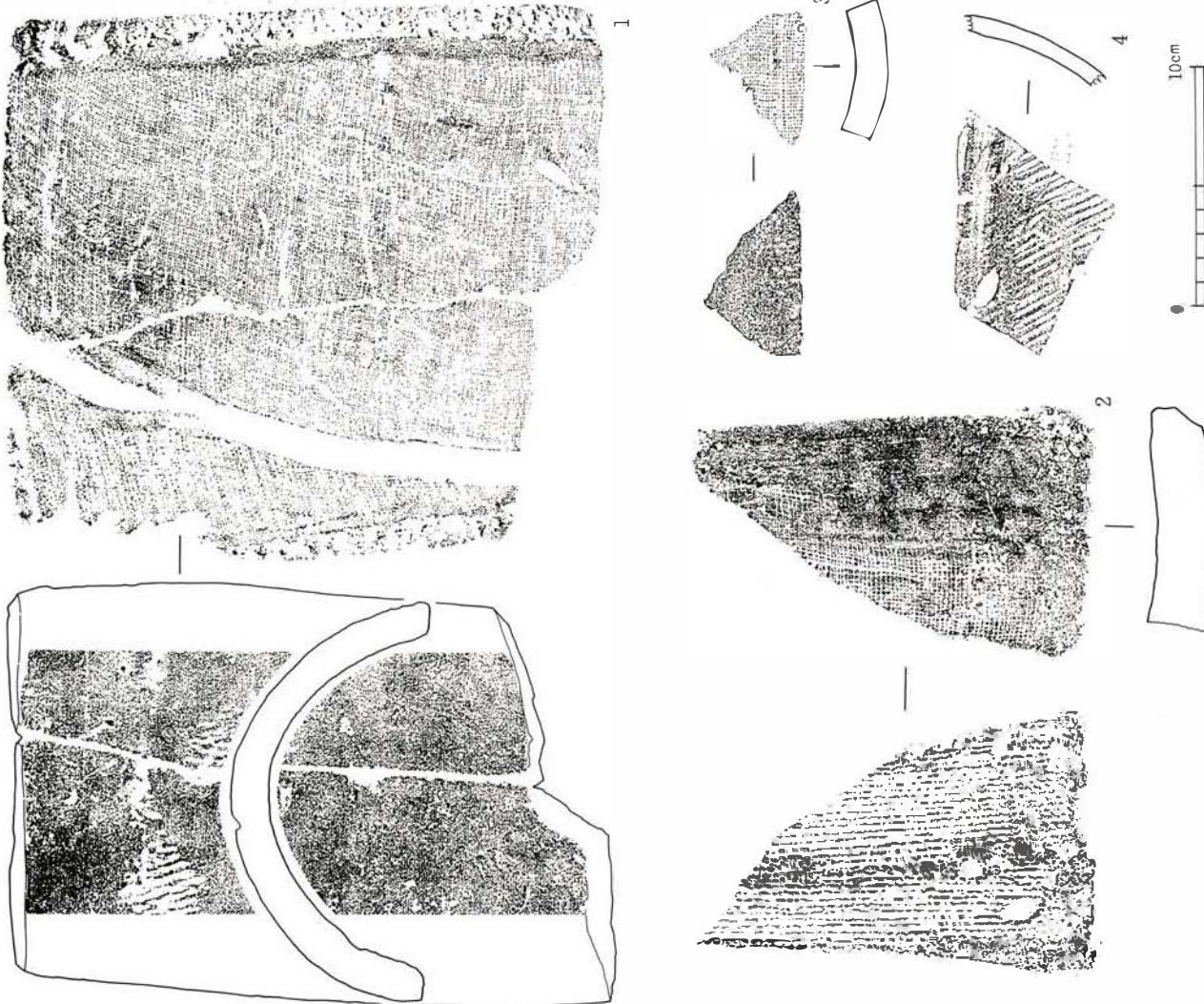


No. 1



第7図 SB 201・202建物跡出土遺物

番号	遺物名	遺構・層位	特徴	微	登録No.
1	丸瓦	SB 201・No.7柱穴	凸面スリケシ、凹面布目模あり		—
2	平瓦	SB 202・No.2柱穴	凸面側目、凹面布目、ケメリあり		—
3	平瓦	SB 202・No.1柱穴	凸面スリケシ、凹面布目		—
4	須恵器	SB 202・No.2柱穴	外面平行叩き目、内面ナデ		R-12



(2) 土 壤

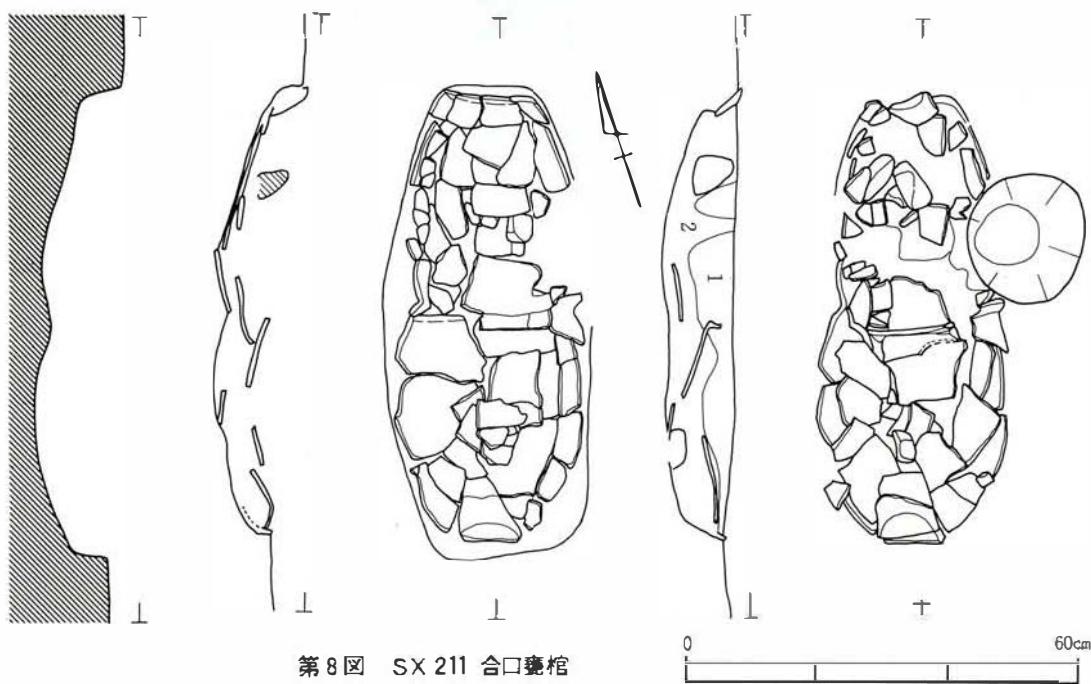
S K 213 土壌 調査区の中央部やや東側で検出されたものである。平面形は北東部の地山面が削られているため不整形であるが、東西 240 cm、南北 245 cmを計りほぼ円形を呈するものと思われる。深さは約40cmで壁は緩やかに下降して底部は船底状に窪んでいる。土壌内から壁の傾斜に沿って拳大から人頭大の石が検出されている。石は下半部から底部にかけて密集した状況で出土しており、おそらく全体的に敷石されていたものと思われる。埋土は褐色土と黒褐色土が自然堆積した状況を呈しており、黒褐色土と石の間から遺物が出土している。

出土遺物は、土師器、須恵器の破片と平瓦や丸瓦が比較的多量に出土したほか、軒丸瓦や軒平瓦も各 1 点ずつ検出されている。

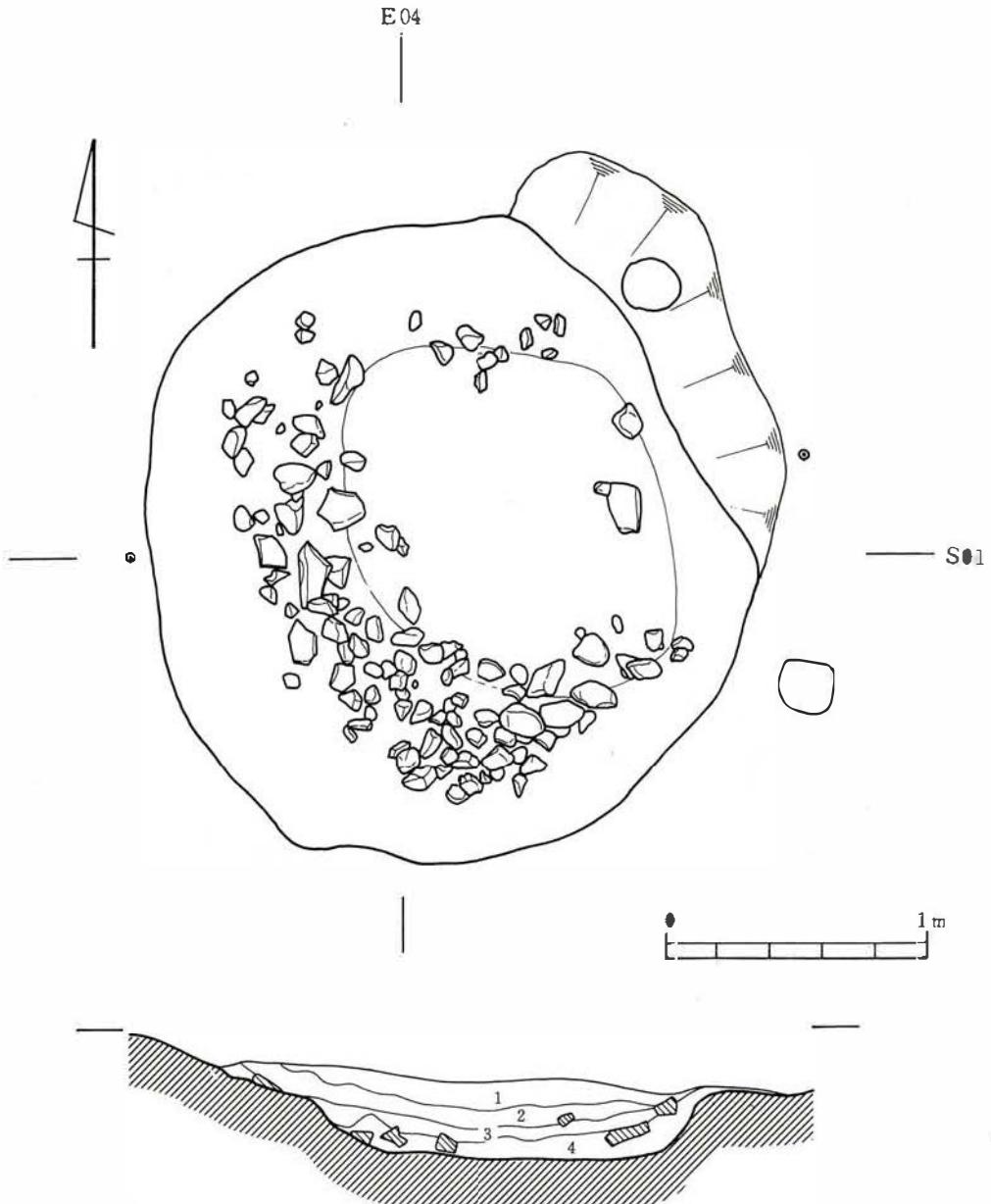
S K 215 土壌 調査区の中央部西側で検出されたものである。平面形は南北に細長い長方形状を呈するが、数カ所が攪乱の穴によって削られている。南北約 250 cm、東西約 70 cmで深さは約 20 cm を計る。壁は 5 cm 程度の立上がりをもつが、底部は緩やかに窪んでやや凹凸を有する。埋土は褐色土が自然堆積した状況を呈するが、層中に炭化物や焼土さらに凝灰岩の粒などが混入する特徴をもつ。出土遺物は、須恵器片と瓦片が少量出土している。

(3) 合口甕棺

S X 211 合口甕棺 調査区の北西部で検出されたもので、丘陵の平坦部から斜面へ移行する丘陵の縁辺部にあたる。遺構は長さ 70 cm、幅 40 cm の土壌内に長胴甕 2 個体が検出された。甕は横位置に口縁部を合わせた状態で据えられており、土圧によって上方部が潰れて下方部の土器と接して出土したところもある。遺構の一部がピットで壊されているが、ほぼ完全な形で発見

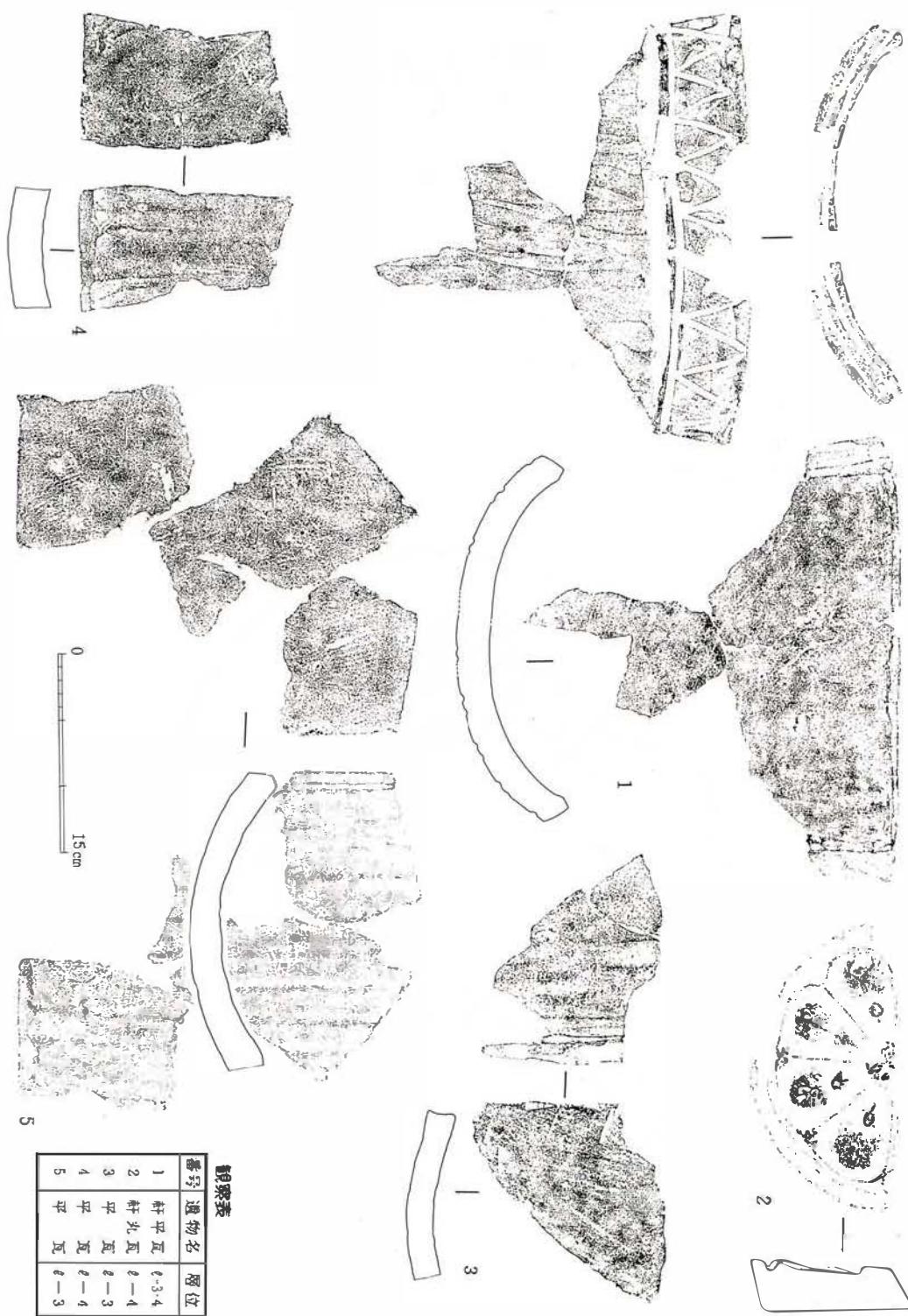


第 8 図 SX 211 合口甕棺



層位	土色	土性・その他
1	褐色土(7.5 YR 5/6)	粘性はなく、しまりがある。灰褐色土を混入する。
2	黒褐色土(8 3/6)	やや粘性をもつしまりが強い。
3	+(8 3/6)	+
4	褐灰色土(8 3/6)	粘性やや強く、しまりがある。明褐色粒子を含む。

第9図 SK 213土壤



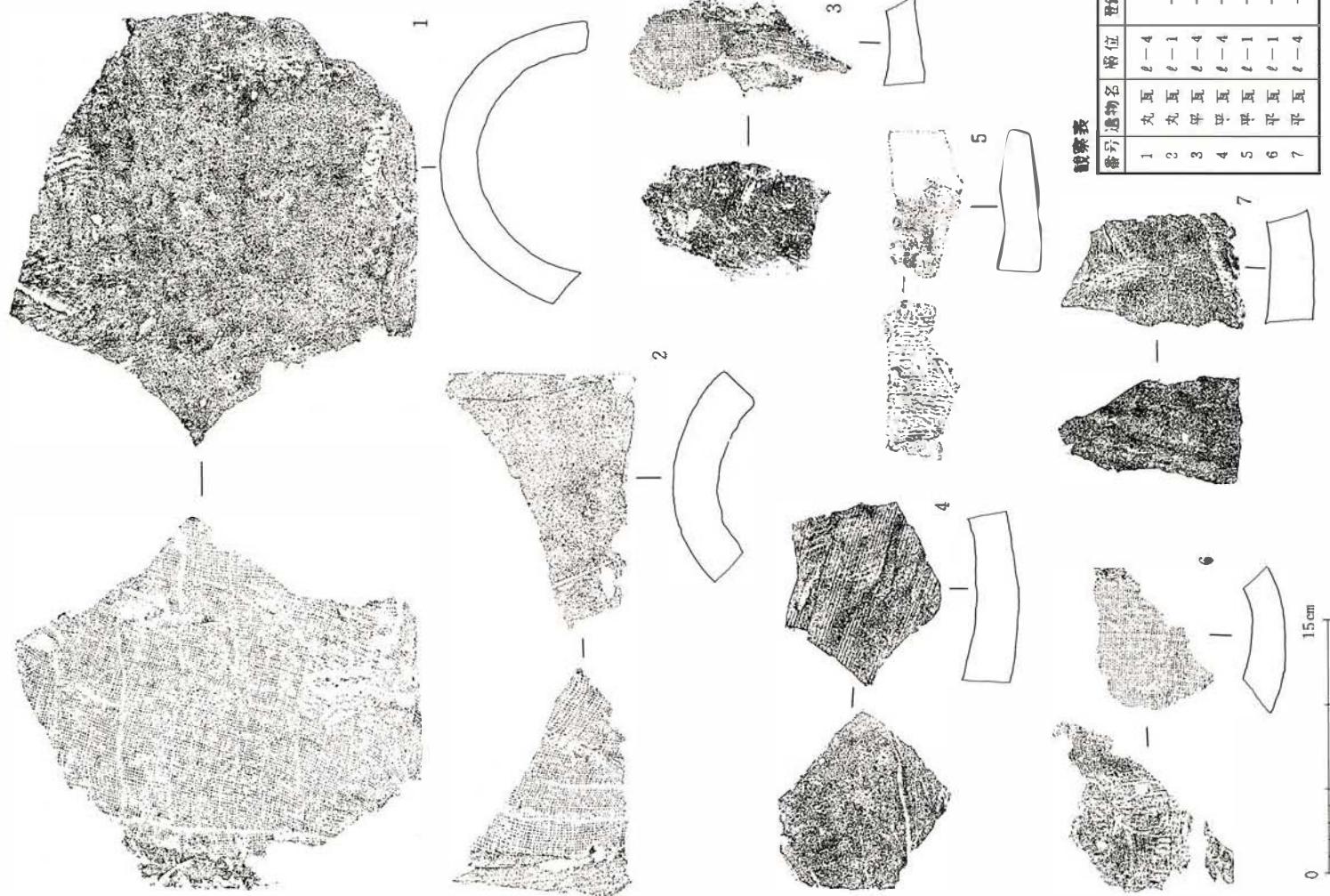
第10圖 SK 213土壤出土遺物

觀察表			
器名	遺物名	層位	厚度mm
1	軒平瓦	Ⅳ-3-4	R-20
2	軒瓦	Ⅳ-4	R-19
3	平瓦	Ⅳ-3	-
4	平瓦	Ⅳ-4	-
5	瓦	Ⅳ-3	-

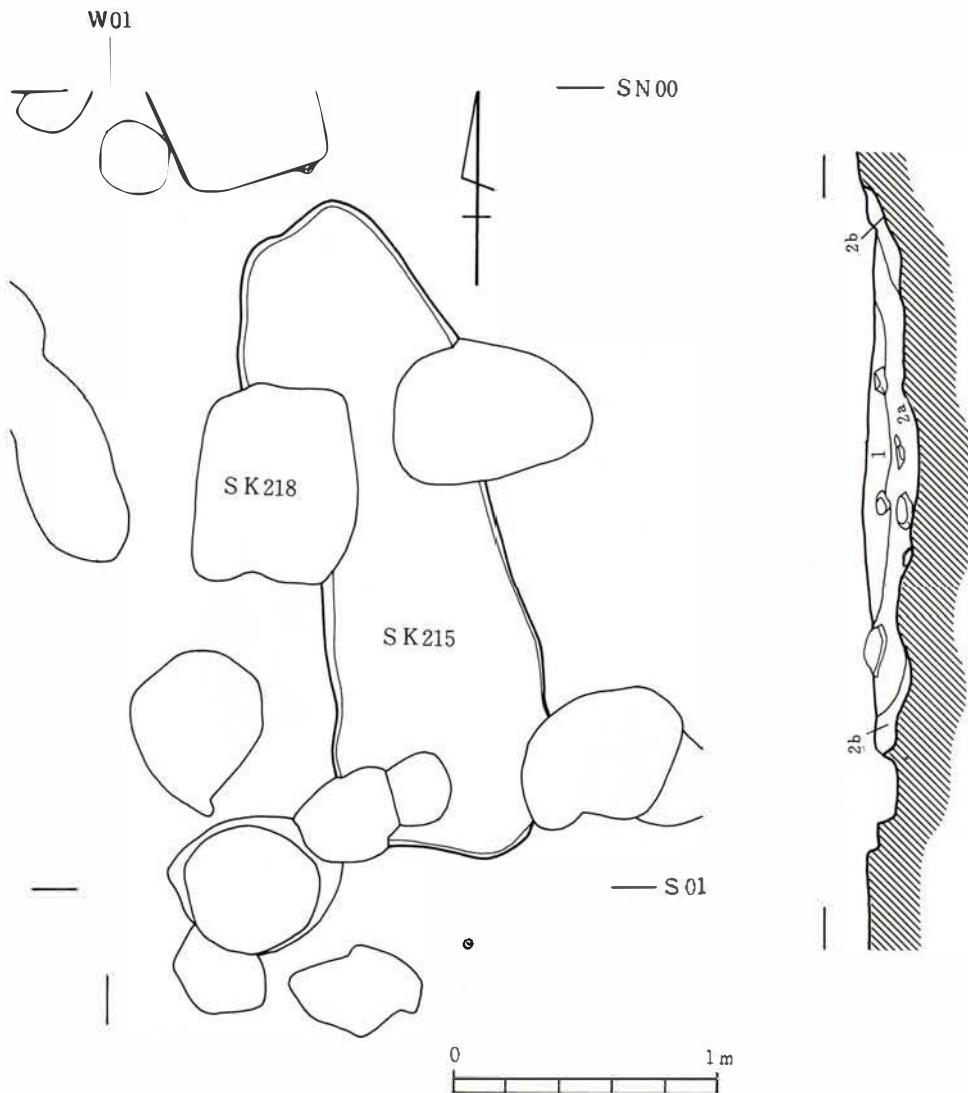
第11図 SK 213 土壙出土遺物

調査表			
番号	遺物名	層位	登錄No.
1	丸瓦	2-4	-
2	丸瓦	2-1	-
3	平瓦	2-4	-
4	平瓦	2-4	-
5	平瓦	2-1	-
6	平瓦	2-1	-
7	平瓦	2-4	-

15cm



された。棺の中からは石が数個入っている他は、出土遺物は皆無である。甕棺に使われた土器は、土師器の長胴甕で一個体は高さ35.4cm、口径24.6cm、最大径26.6cmもう一個体は高さ36.0cm、口径20.5cm、最大径23.0cmをはかる。



層位	土色	土性・その他の 特徴
1	黄褐色土(10YR 5/6)	粘性弱く、ややしまりがある。 炭化物、焼土粒、凝灰岩粒を含む。
2a	褐色土(5 / 6)	粘性弱く、しまりがある。 炭化物を多量に含む。凝灰岩粒は少量含む。
2b	+(")	粘性弱く、しまりがある。 凝灰岩粒と黄褐色粘土ブロックを含む。

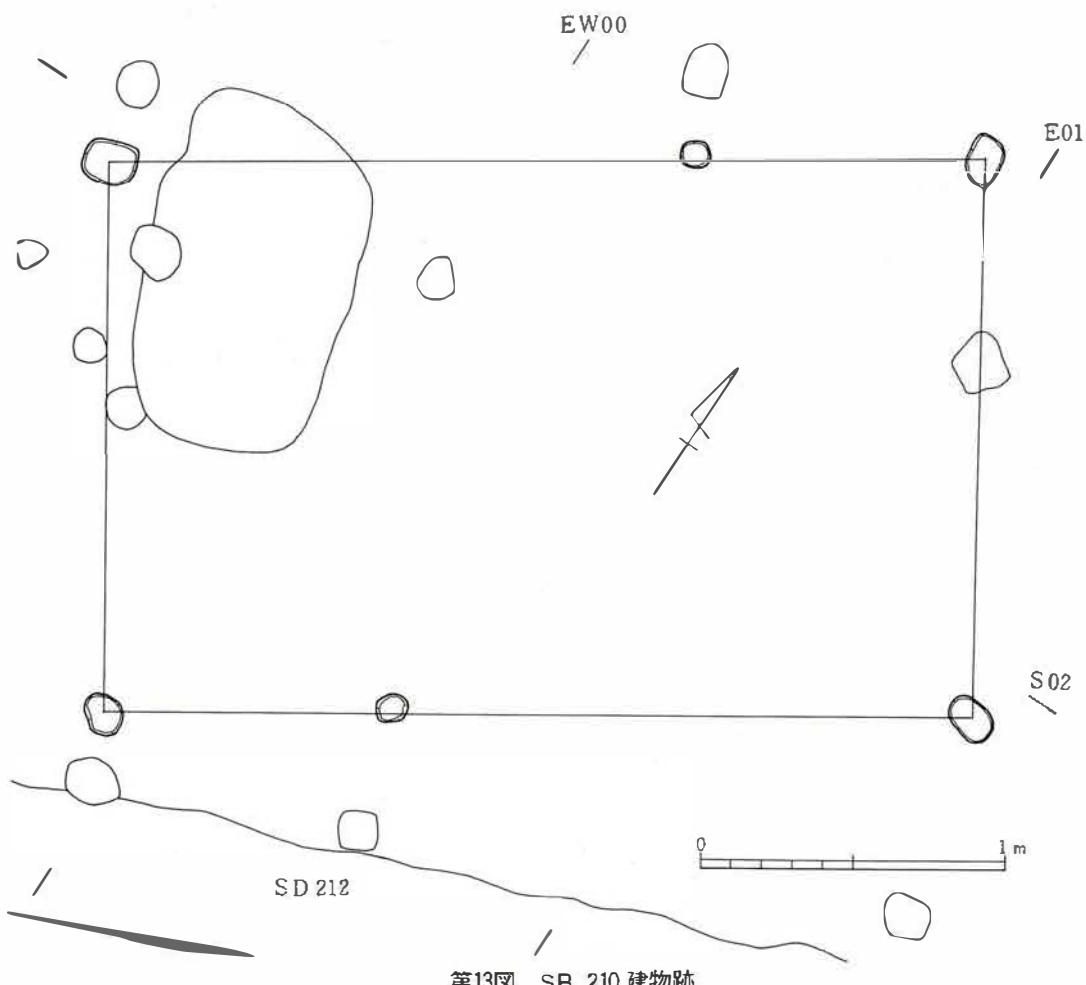
第12図 SK 215土壤

2 近世の遺構と遺物

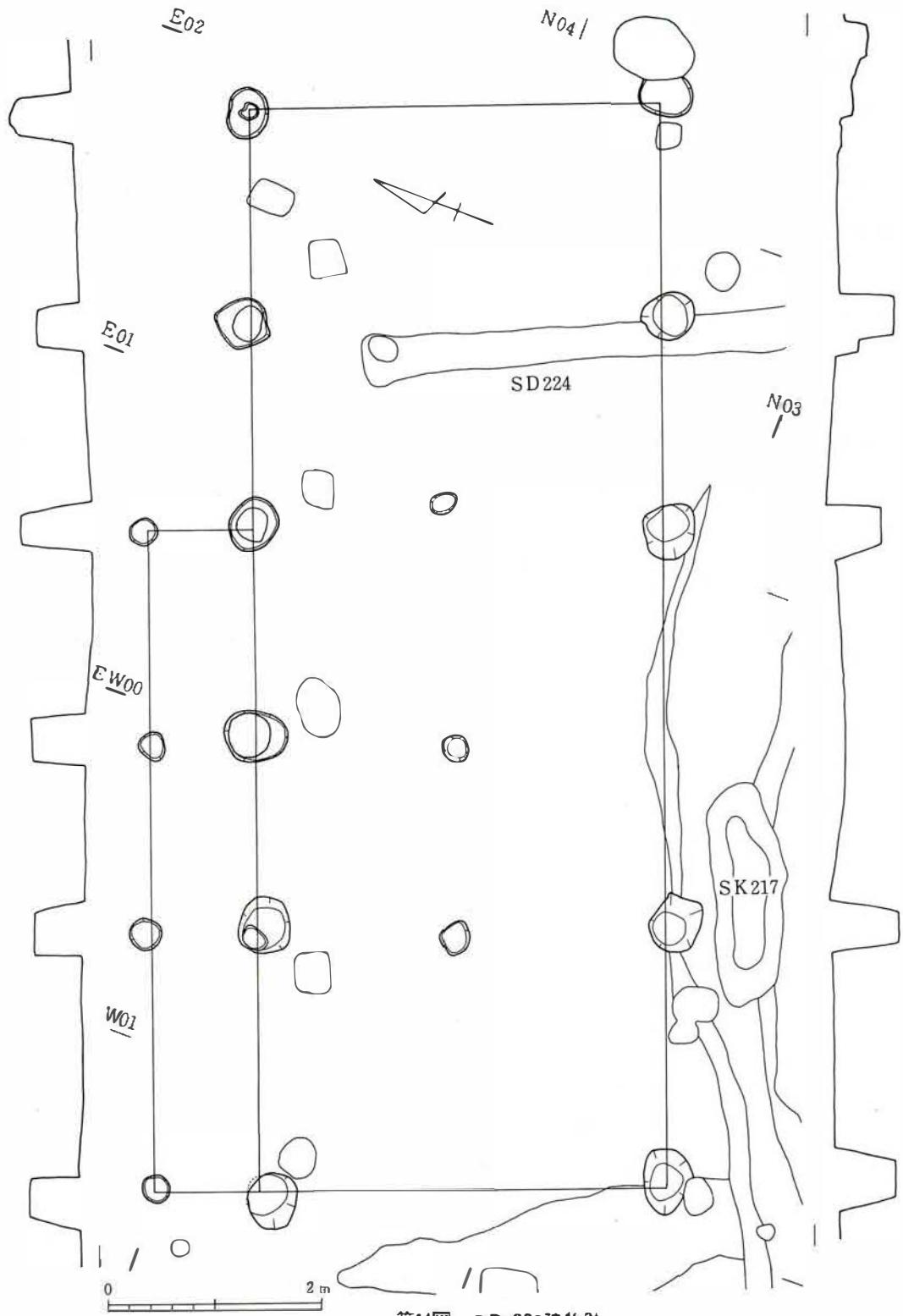
(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区の全域から検出されている。南北棟3棟、東西棟5棟が確認されているが、その他にも多数の柱穴が検出されており、おそらく8棟の建物跡と重複する建物が存在していたものと思われる。発見された建物跡は、柱穴の規模や建物の方向によって分類され、遺構が重なっていることから最低2時期にわたって建てられていたものと思われる。

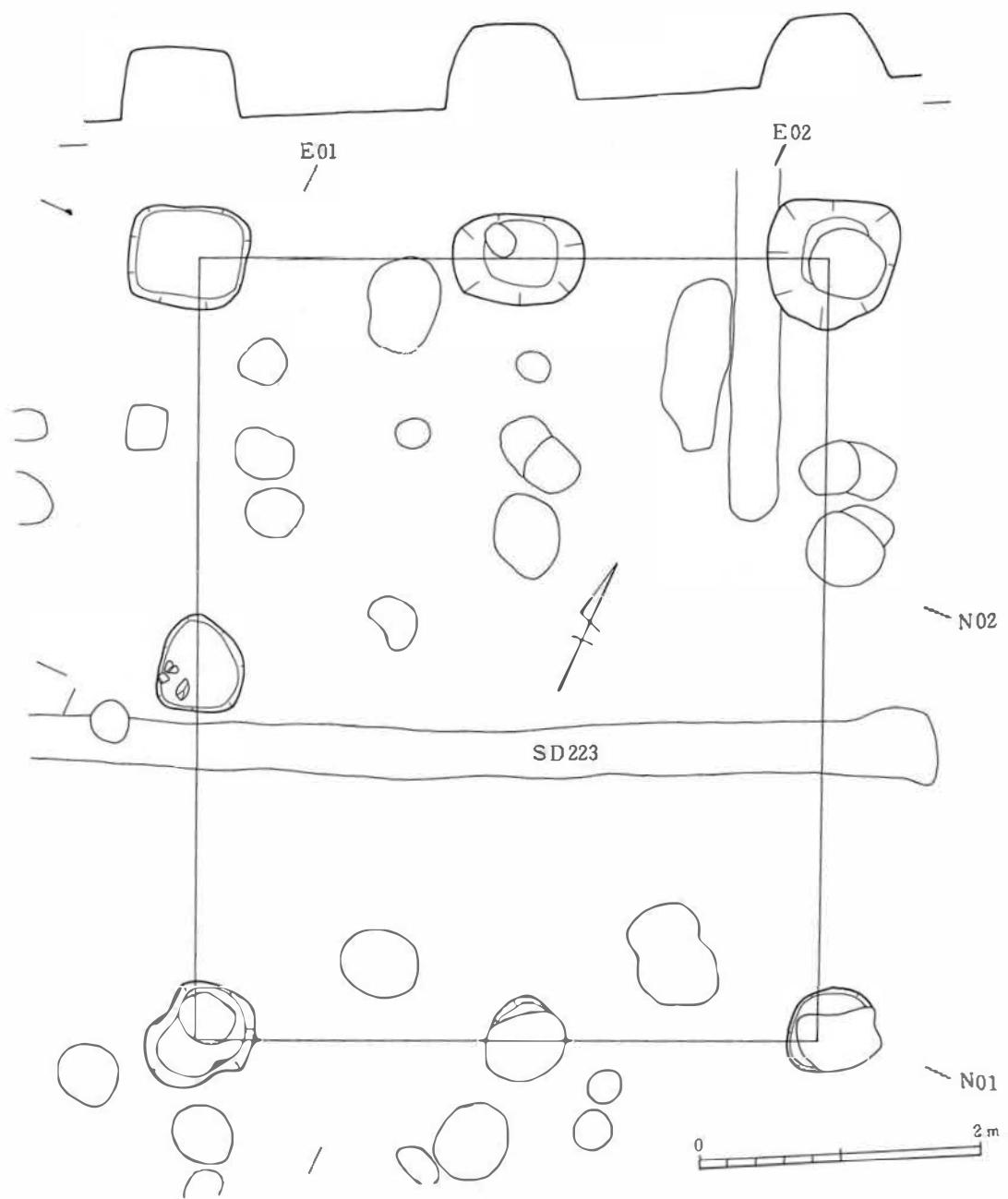
8棟の建物跡は、調査区の南東部から北西部にかけて分布しているが、中央部北側の3棟は建物跡の中でも規模が大きなものである。最北部に位置するSB 209建物跡は、桁行5間、梁行1間の東西棟で北側に西妻から3間目まで廂が付けられている。また、床束とみられる柱穴が3個検出されている。柱穴は径50cm程の円形または橢円形を呈し、深さは50~70cmを計る。柱痕跡は15~18cmである。柱間寸法は北側柱列で西から2.36m, 1.94m, 1.9m, 1.9m, 2.04mで総長10.14m、南側柱列で西から2.4m, 3.8m(2間分), 1.9m, 2.06mで総長10.16mで



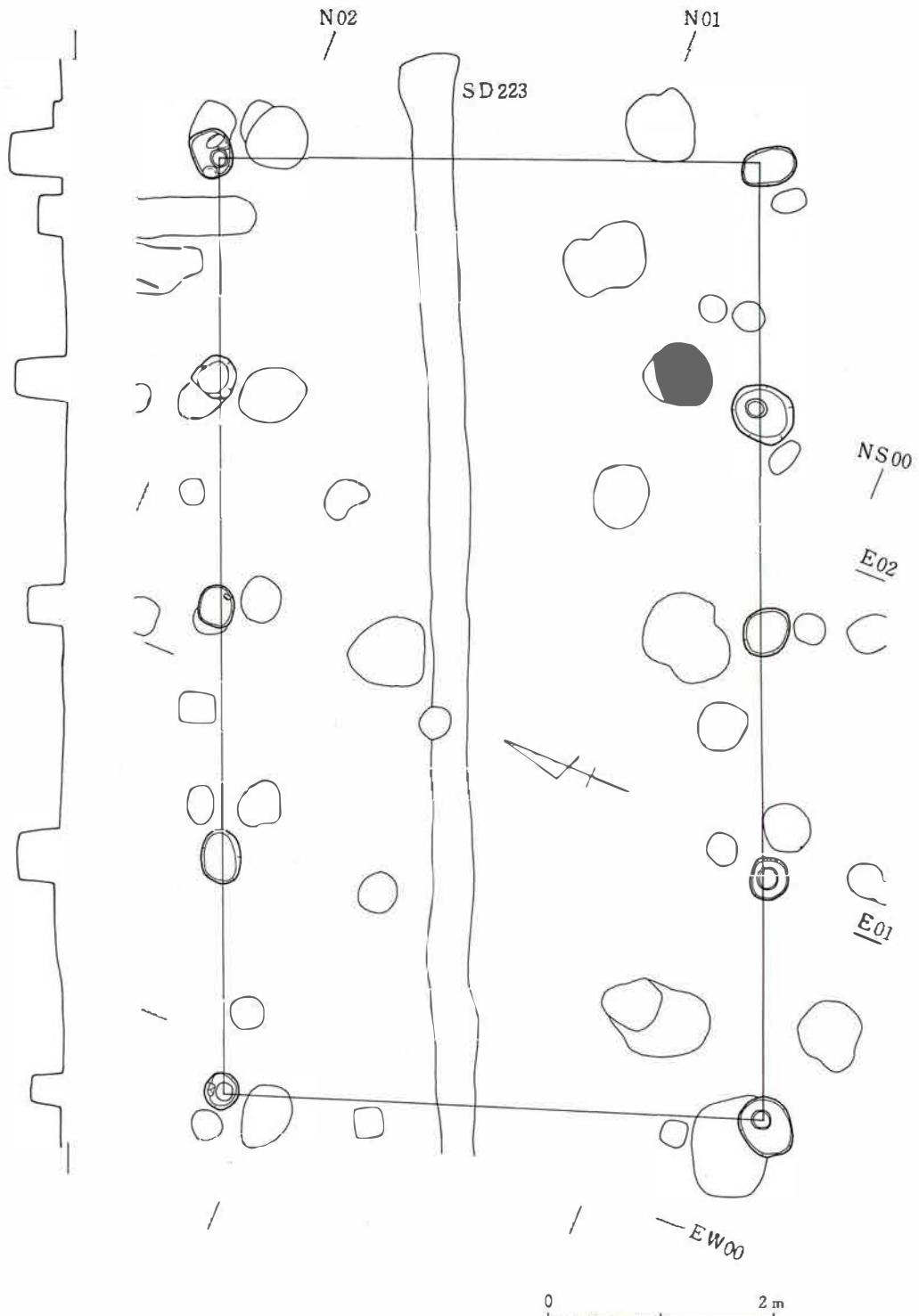
第13図 SB 210 建物跡



第14図 SB 209建物跡



第15図 SB 208 建物跡

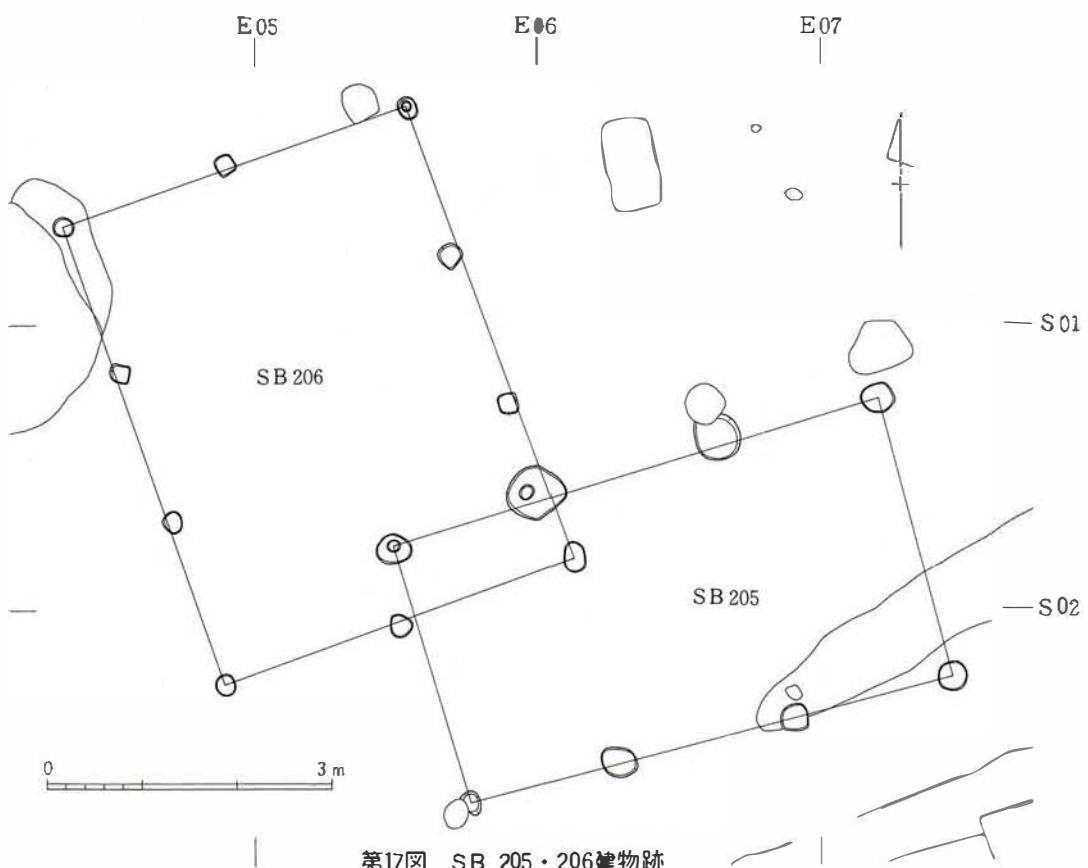


第16図 SB 207建物跡

ある。西妻は3.8m, 1.0mで総長4.8mである。

SB 207・208建物跡は、209建物跡の南に検出されたものである。207建物跡は桁行4間、梁行1間の東西棟であり、208建物跡は桁行2間、梁行2間の南北棟で207建物跡の東側と重複関係をもっている。柱穴は207建物跡が径30~50cmの円形か橢円形であるが、208建物跡は近世の建物群の中で最も規模が大きく、特に北妻柱列の柱は一辺90cm程の方形か長方形を呈している。柱間寸法は207建物跡が北側柱列で西から2.1m, 2.26m, 2.04m, 1.94mで総長8.34m、南側柱列で2.15m, 2.2m, 2.0m, 2.17mで総長8.52mである。妻柱列は、西妻・東妻とともに4.8mである。

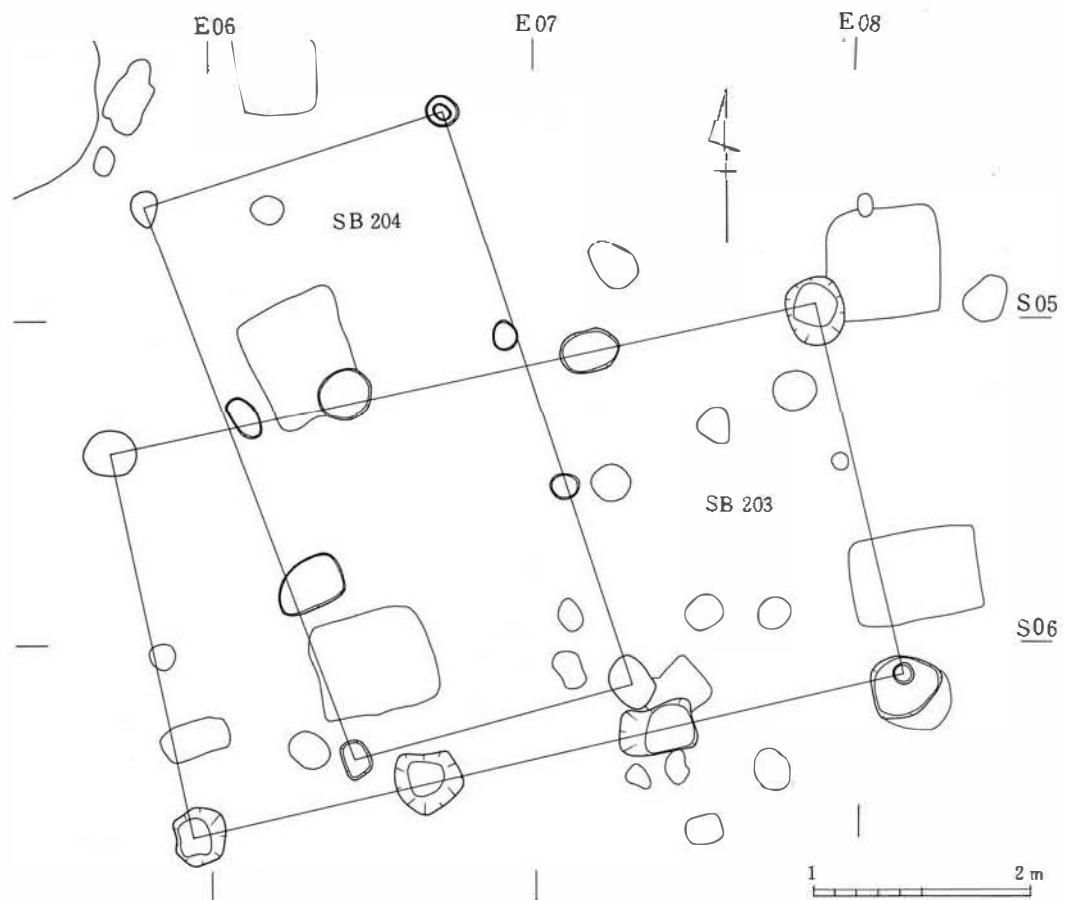
SB 205・206建物跡は、東側拡張区の中央部で検出されたものである。205建物跡は桁行3間、梁行1間の東西棟であり、206建物跡は桁行3間、梁行2間の南北棟で南東部分が205建物跡と重複関係をもっている。柱穴は205建物跡が径20cm程度の円形であるが、206建物跡はそれより一回り大きく径30~40cmを呈する。柱間寸法は、205建物跡が桁行総長で5.34m(北側柱列)、東妻柱列で3.04mであり、206建物跡は桁行総長5.12m(西側柱列)、南妻柱列で3.92mとなり、調査区の北側の建物跡に比べて小規模な建物である。



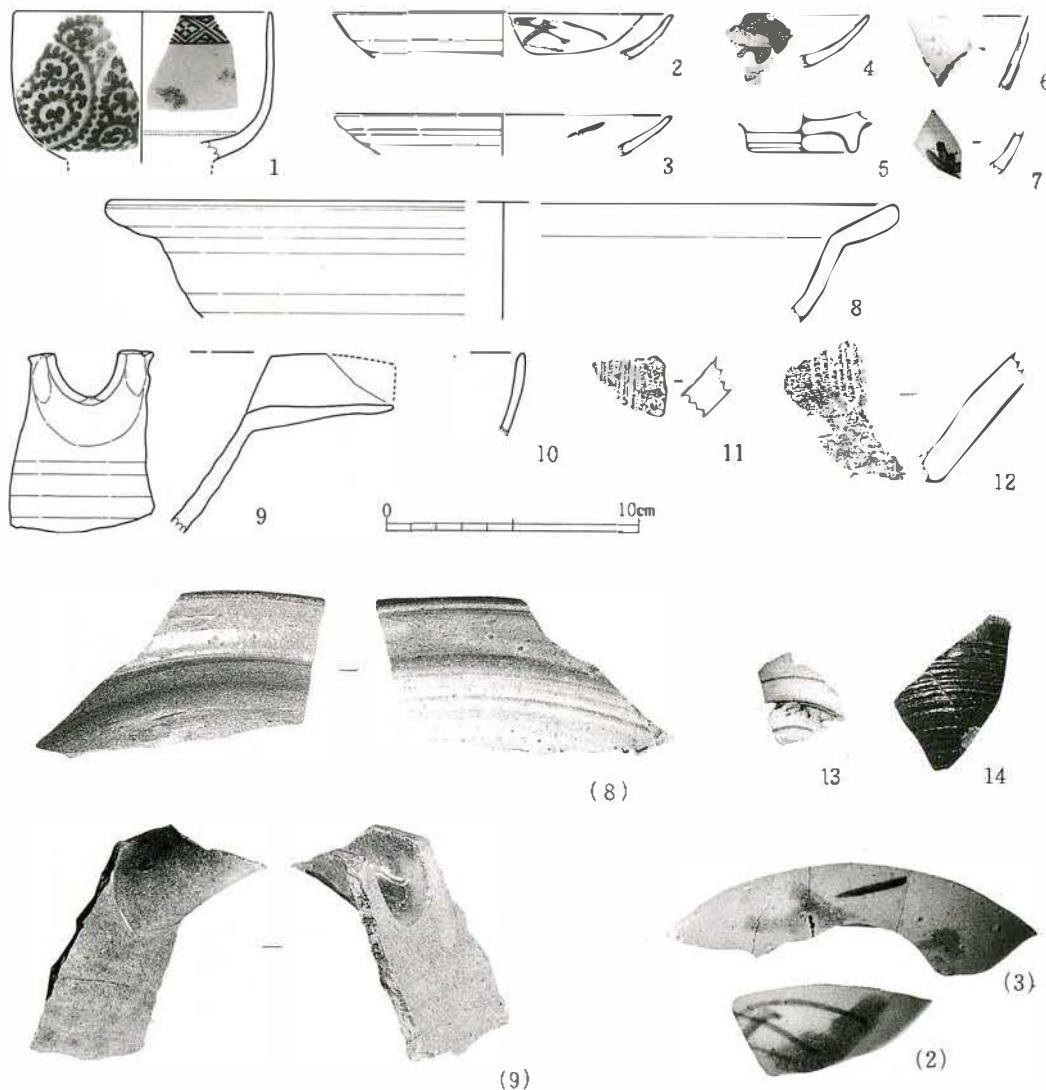
SB 203・204建物跡は、調査区の南端部で検出されたものである。203建物跡は桁行3間、梁行1間の東西棟であり、204建物跡は桁行3間、梁行1間の南北棟でこの2棟も重複関係をもっている。柱穴は203建物跡の方が規模が大きく径50cmの円形を呈している。

SB 210建物跡は、調査区の西側で検出されたもので桁行3間、梁行1間の東西棟建物跡とみられる。柱穴は小規模であり、建物規模も北側の建物跡に比べて小さいものである。

これらの建物跡の柱穴やその他の柱穴とみられるピット中からは、染付椀・皿や施釉陶器播鉢・鉢・椀・片口など近世に属する遺物が出土している。



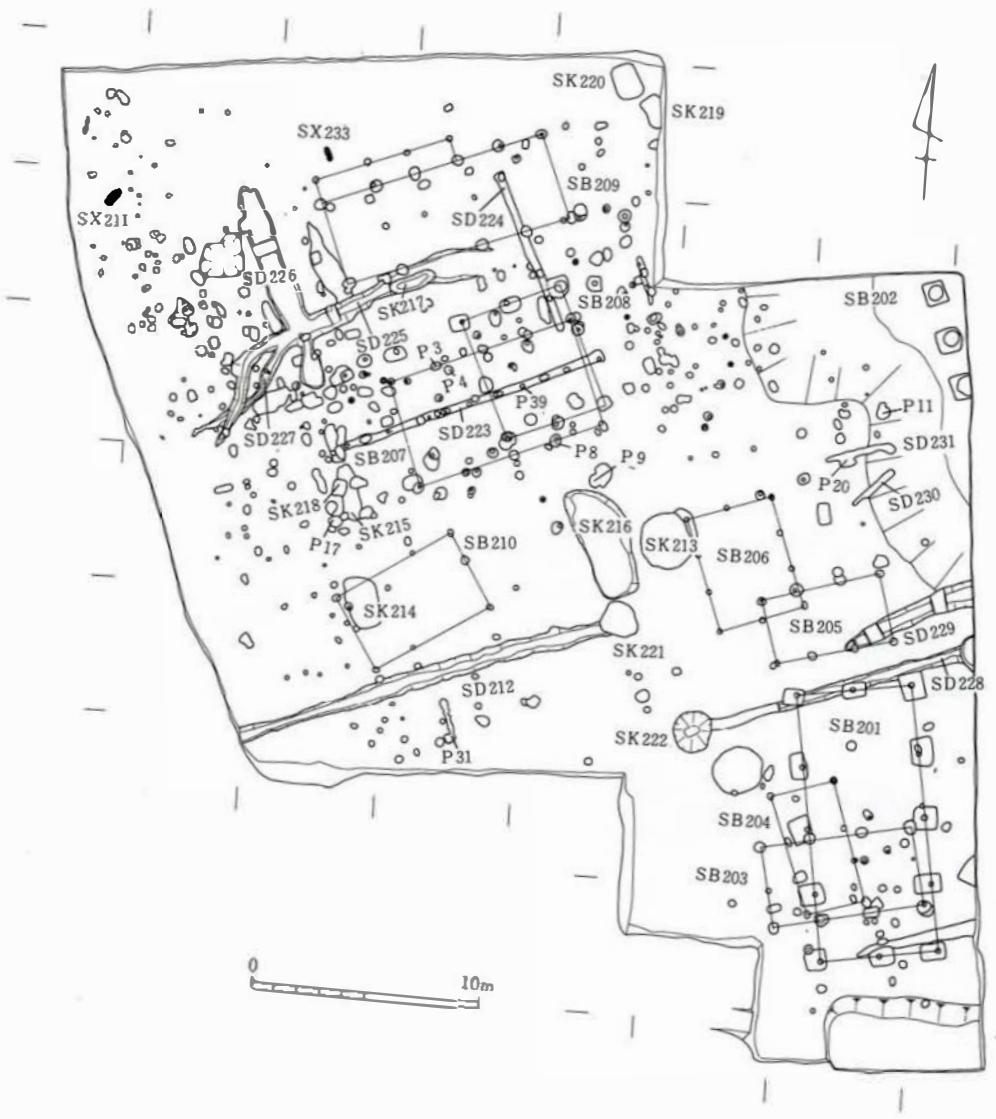
第18図 SB 203・204建物跡



観察表

番号	遺物名	遺構・層位	特徴	産地	年代	登録No
1	染付 梵	P 39・ℓ-1	外面にたこ唐草文、内面底部には松竹梅彫文	伊万里	18C-末	R-61
2	染付 盆	P 4・ℓ-1	内面に文様あり	伊万里	18C-末	R-56
3	染付 盆	P 4・ℓ-1	内面口縁部に文様あり	伊万里	18C-末	R-55
4	染付？ 盆	P 31・ℓ-1	内面に文様あり	—	—	R-26
5	染付 梵	P 8・ℓ-1	高台外面に二条の線あり	伊万里	—	R-57
6	染付 梵	P 11・ℓ-1	外面に文様あり	伊万里	—	R-26
7	染付 梵	P 17・ℓ-1	外面に文様あり	伊万里	—	R-60
8	施釉陶器 鉢	P 20・ℓ-1	内面は白七刷毛塗り、外面透明釉あり	唐津	—	R-25
9	施釉陶器片口	P 4・ℓ-2	内外面に灰釉	—	—	R-23
10	施釉陶器	P 3・ℓ-1	灰釉、9と同一個体か	—	—	R-22
11	施釉陶器擂鉢	P 24・ℓ-1	内外面に鐵釉	—	—	R-45
12	施釉陶器擂鉢	P 9・ℓ-1	内外面に鐵釉、内面磨耗	—	—	R-44
13	染付 小梵	P 9	外面高台部に条線	—	—	R-58
14	施釉陶器 梵	P 9・ℓ-1	内面と外面上半部に灰釉、外面下半部に鐵釉をかけ分ける	相馬大縣	—	R-164

第19図 掘立柱建物跡、ピット出土遺物

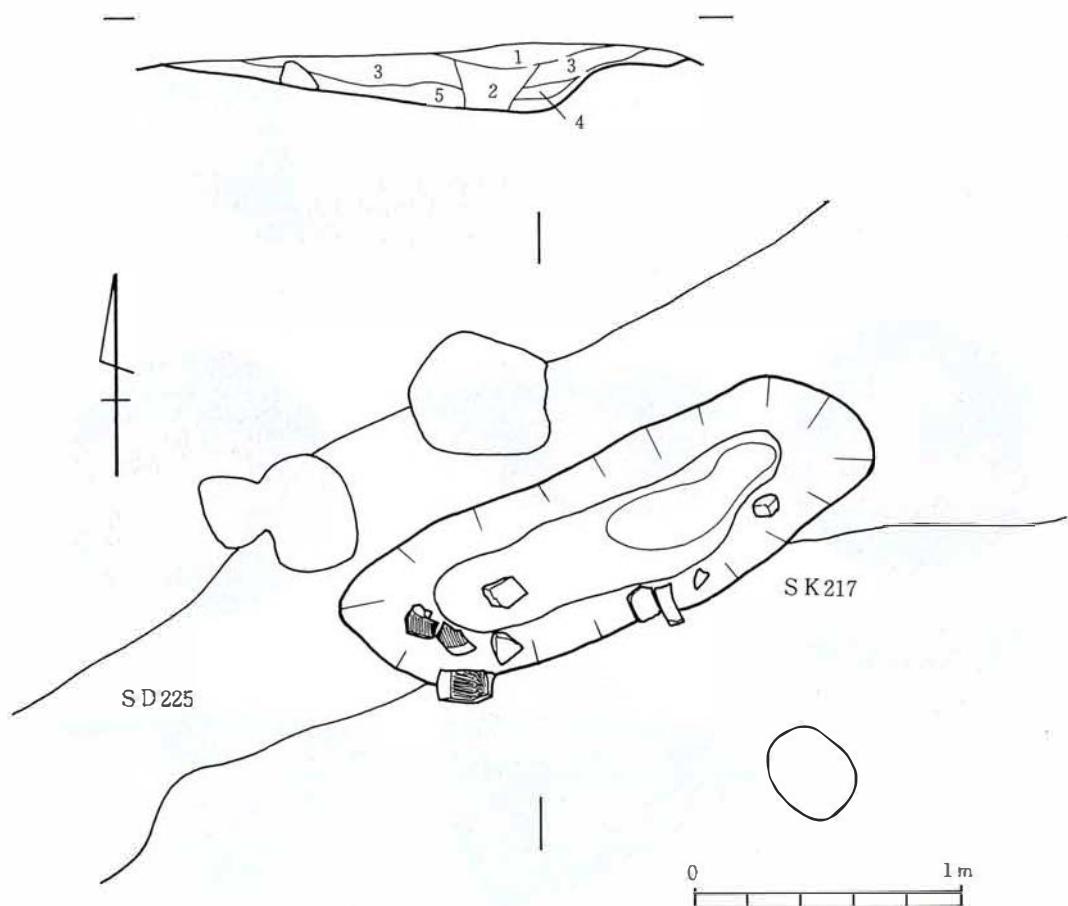


第20図 遺構全体図

(2) 土壌

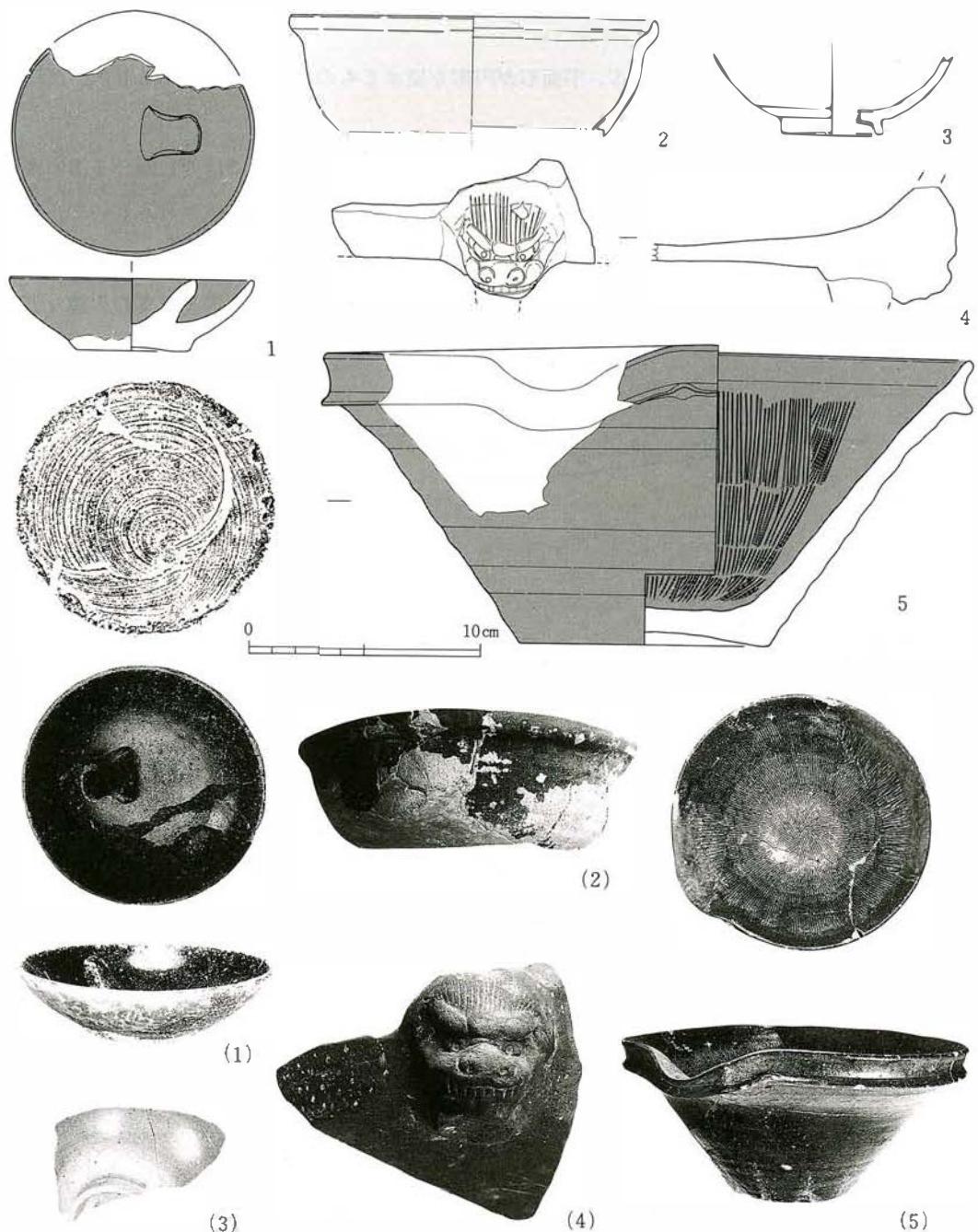
近世の土壌は9基検出されている。平面形が円形を呈するもの、長方形を呈するもの、橢円形を呈するものがある。

SK 221 土壌は、東に延びる溝の西端部に接続しており、SK 222 土壌は西に延びる溝の東端部に接続している。SK 217 土壌は、SB 209 建物跡の南に近接して検出されたもので、長軸2m 短軸0.7m の橢円形を呈する。深さは約25cmで壁は西側から緩やかに下降して東側で立上がる。土壌の縁辺部から底部にかけて施釉陶器の播鉢、灯明皿、椀、土鍋や瓦質の火鉢など



層位	土色	土性・その他
1	にぶい黄褐色土(10 YR 5/6)	黄色地山粒を含む。硬質で粘性なし。
2	明褐色土(4/6)	“ “ にぶい黄橙色土を含む。
3	黄褐色土(2/6)	“ “ “
4	にぶい黄橙色土(3/6)	黄色地山粒を少量含む。
5	暗褐色土(6/6)	粘性をもちしまりがある。炭化物を多く含む。

第21図 SK 217 土壌

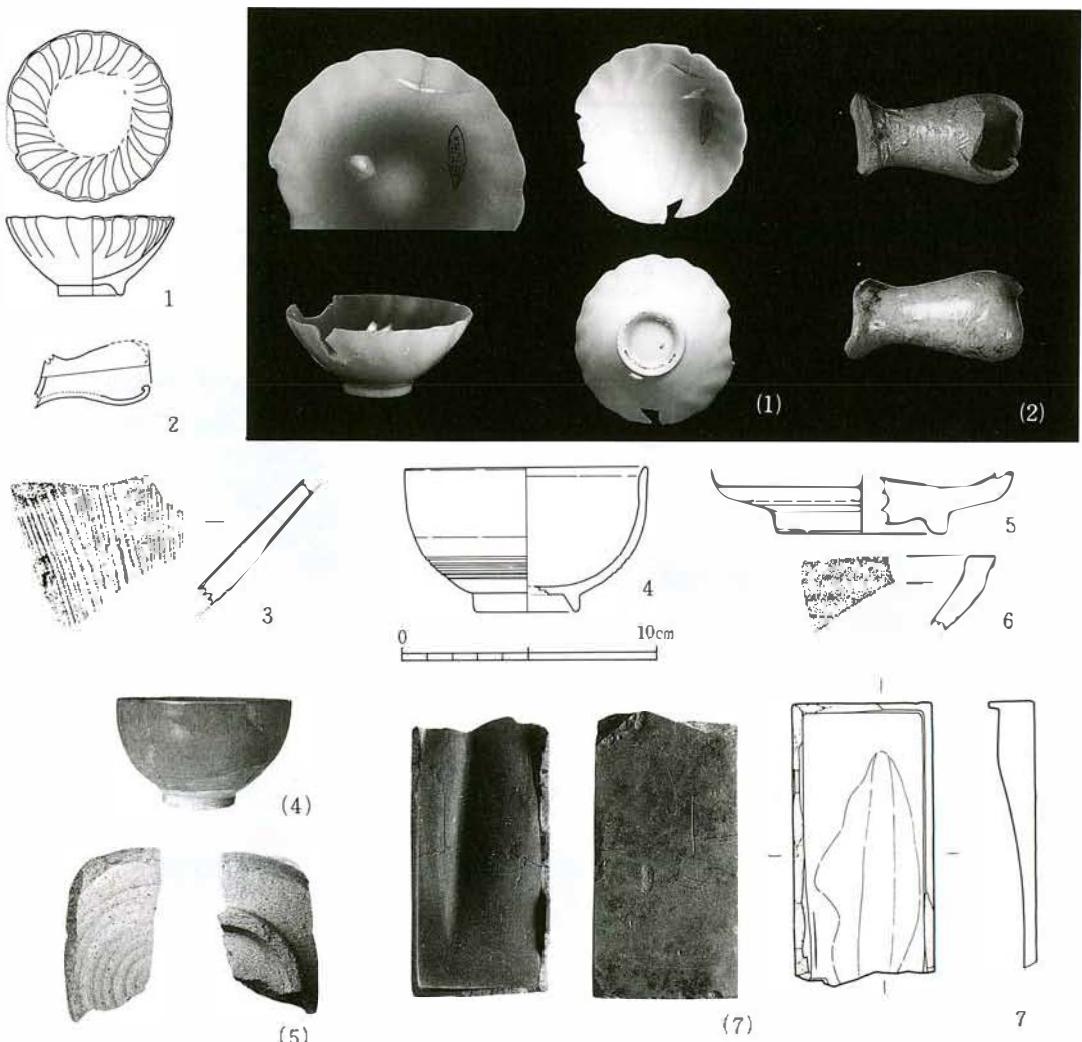


観察表

番号	遺物名	層位	特徴	登録No.
1	施釉陶胎灯明皿	⑥-1	内面と外面全体に鉄釉、底部回転糸切り、内面中央部に舌状の灯芯受け 内外面に鉄鎗釉	R-36 R-51
2	↑ 七鍋	⑥-1	高台部無釉、他は火炎釉(漢地:相馬大塚)	R-37
3	↑ 燃	⑥-5		R-71
4	瓦質七器 火鉢	⑥-6	脚の付け根に獅子(あるいは豹犬)の立体的顔面装飾	R-53
5	施釉陶器 搪鉢	⑥-6	全面に鉄釉、底部回転糸切り、片口あり	

第22図 SK 217土壤出土遺物

が一括出土している。その他の土壌からの出土遺物としては、SK 216 土壌から施釉陶器の椀、香炉、擂鉢と硯が出土しており、SK 214 土壌からは施釉陶器の皿・擂鉢・椀・染付皿、白磁水滴などが出土している。また、SK 221 土壌から内面に「遠刈田」の赤文字の銘があり、さらに白文字で「ラヂウム 温泉旅館 大沼喜三郎」と書かれた白磁の輪花盃が出土している。



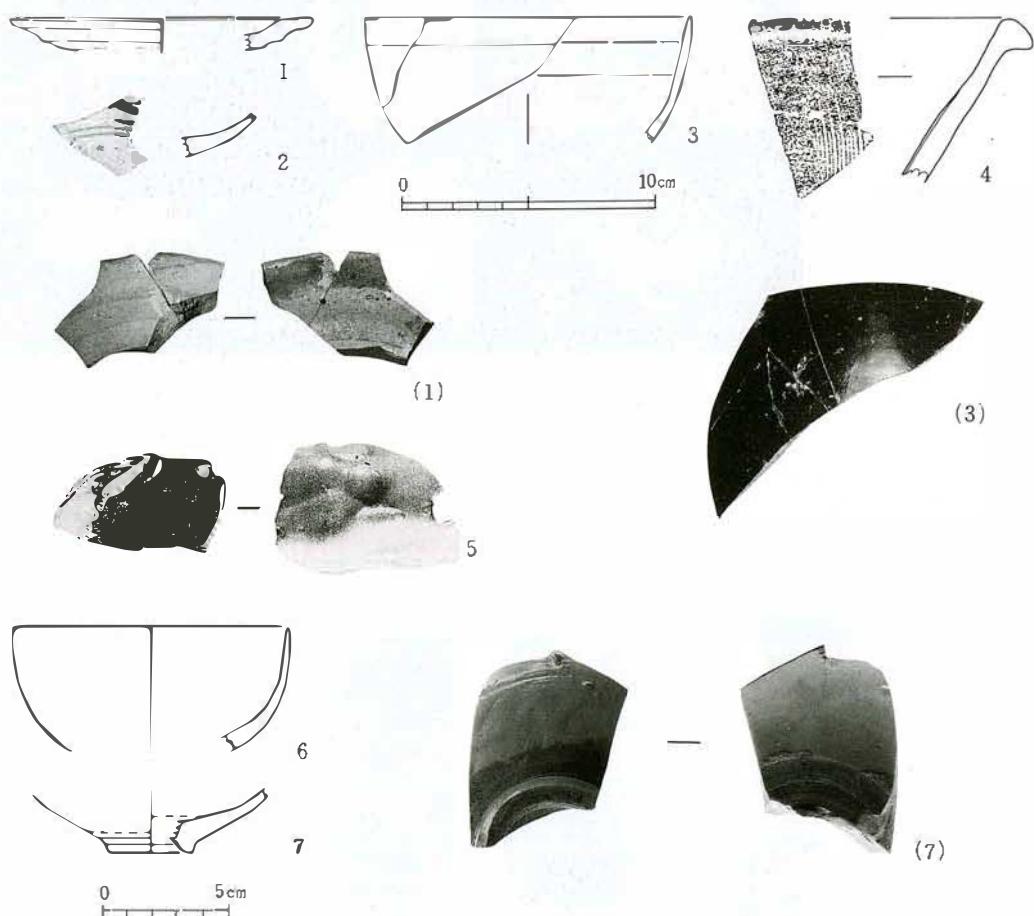
観察表

番号	遺物名	遺構・層位	特徴	産地	年代	登録No.
1	白磁 輪花盃	SK 221・Ⅰ-1	内面に赤文字で「遠刈田」、白文字で「ラヂウム 温泉旅館 大沼喜三郎」	-	-	R-67
2	施釉陶器香炉	SK 221・Ⅰ-1	把手、全面に灰釉	-	-	R-32
3	施釉陶器擂鉢	SK 222・Ⅰ-1	内外面に鐵釉	-	-	R-33
4	施釉陶器 椭	SK 216・Ⅰ-1	内外面とも灰釉、高台部は無釉	相馬大郷	-	R-35
5	施釉陶器香炉	SK 216・Ⅰ-1	内面に回転ペラケズリ痕が跡腺、外面全体には灰釉、内面無釉	-	-	R-34
6	施釉陶器擂鉢	SK 216・Ⅰ-1	内外面に鐵釉	-	-	R-50
7	石製品 硯	SK 216・Ⅰ-1	質岩、表面に著しい使用痕あり	-	-	R-74

第23図 土壌出土遺物

(3) 溝跡

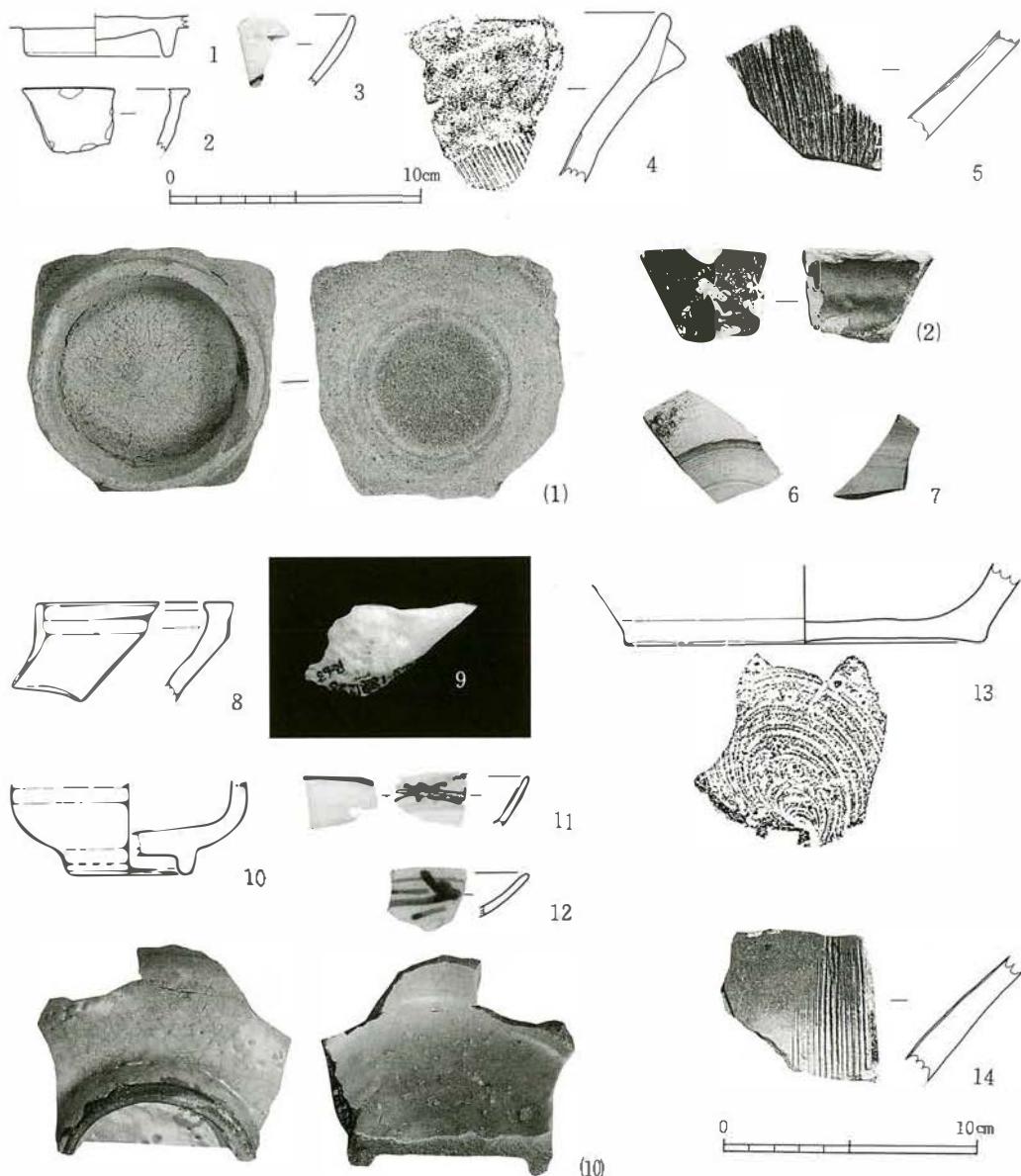
溝跡は、東西方向に延びるもの7条、南北方向に延びるもの1条が検出されている。調査区の南半部に検出されたSD 212・228溝跡は共に東西方向に延びる溝跡で方位が同じであること、先端部に土塊が取り付くことなどの共通性をもっている。また、調査区の北半部で検出されたSD 225溝跡は、SB 209建物跡やSK 217と重複関係をもっており、SD 225溝跡の方が新しいことが確認されている。



観察表

番号	遺物名	遺構・層位	特徴	溝地	年代	登録No
1	施釉陶器 盆	SK 214・ℓ-1	外面口縁部から内面口縁部にかけて灰釉、内面に重ね焼き痕、外面無釉	-	-	R-105
2	袋付 盆	SK 214・ℓ-1		伊万里	-	R-69
3	施釉陶器 梶	SK 214・ℓ-1	内外面に鉄釉	-	-	R-38
4	施釉陶器擂鉢	SK 214・ℓ-1	内外面に鉄釉、6条1単位の横目	-	-	R-39
5	白磁 水滴	SK 214・ℓ-1	型づくり、頭部後方に孔あり	-	-	R-68
6	施釉陶器 梶	SK 219・ℓ-1	内外面に灰釉	相馬大堀	-	R-41
7	白磁 盆	SK 219・ℓ-1	内面蛇の目釉剥ぎ、高台無釉	伊万里	18C後	R-70

第24図 土壌出土遺物



観察表

番号	遺物名	遺構・層位	特徴	产地	年代	登録No.
1	施釉陶器 盆	SD 212・ℓ-1	内面蛇の目釉剥ぎ、高台部無釉	-	-	R-27
2	施釉陶器 鉢	SD 212・ℓ-1	内外面に鉄釉	-	-	R-43
3	染付 梗	SD 212・ℓ-1	外面に文様あり	伊万里	-	R-62
4	施釉陶器 鎖鉢	SD 212・ℓ-1	内外面に鉄釉	-	-	R-46
5	施釉陶器 鎖鉢	SD 212・ℓ-1	内外面に鉄釉	-	-	R-47
6	陶器 土瓶	SD 212・ℓ-1	底部破片、無釉	相馬大櫛	-	R-29
7	施釉陶器	SD 212・ℓ-1	外面部部分的に灰釉あり、6と同一個体か。	タ	-	R-163
8	施釉陶器 鉢	SD 225・ℓ-1	口縁端部が磨滅している。内外面に鉄釉	-	-	R-48
9	白磁 盆	SD 225・ℓ-1	口縁部輪花	-	-	R-63
10	施釉陶器 梗	SD 226・ℓ-1	高台端部を除き全面に施釉	-	-	R-30
11	染付 盆	SD 226・ℓ-1	内外面口縁部に文様	伊万里	-	R-65
12	染付 盆	SD 226・ℓ-1	内面口縁部に文様	タ	-	R-64
13	陶器 鎖鉢	SD 232・ℓ-1	内面磨耗、底部回転糸切り	-	-	R-54
14	陶器 鎖鉢	SD 227・ℓ-1	内外に薄い鉄釉ありか	-	-	R-49

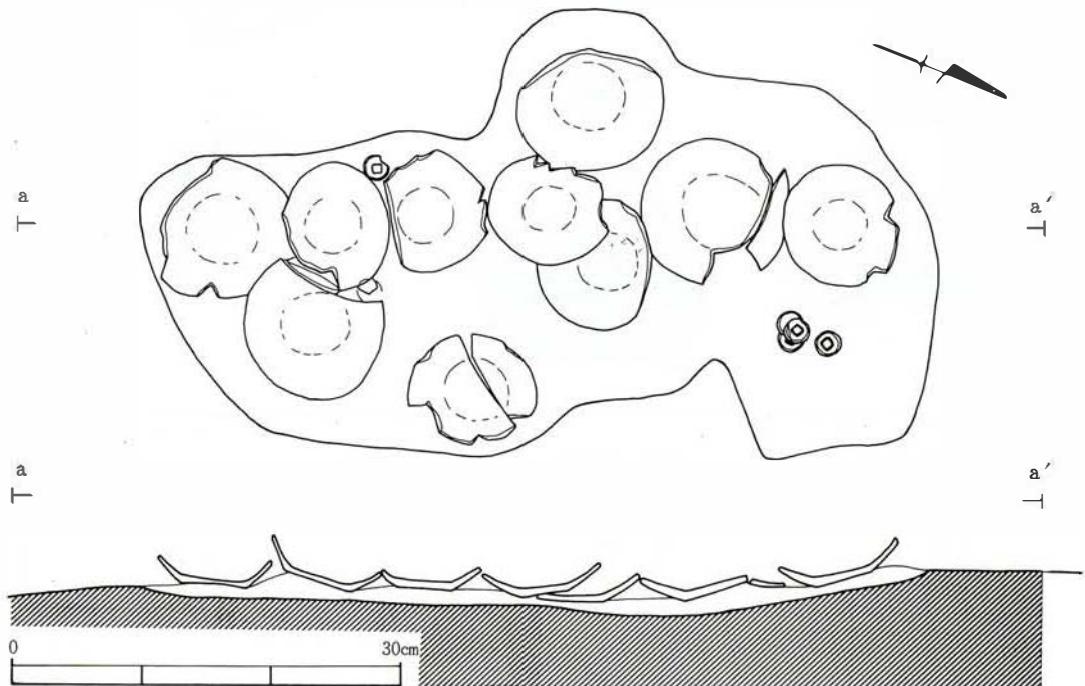
第25図 溝跡出土遺物

また、調査区中央部に位置する SD 223 溝跡は、東西方向に長さ12mにわたって検出されたもので、幅は30cm深さ10cm程度であるが断面は「コ」の字形を呈している。溝の底面から径15~20cmの柱穴が8基検出されており、柱の間隔は1.2~2.0mとまちまちである。さらに、SD 223 溝跡と1.5mの間隔をもいて直交する方位に SD 224 溝跡がある。この溝跡は長さ7.3m、幅30cm、深さ30cmで断面は「コ」の字形を呈し、底部に柱穴が検出されるなど SD 223 溝跡と共通性を有している。この2条の直交する溝跡は、材木埋跡の基礎布掘と考えられる。

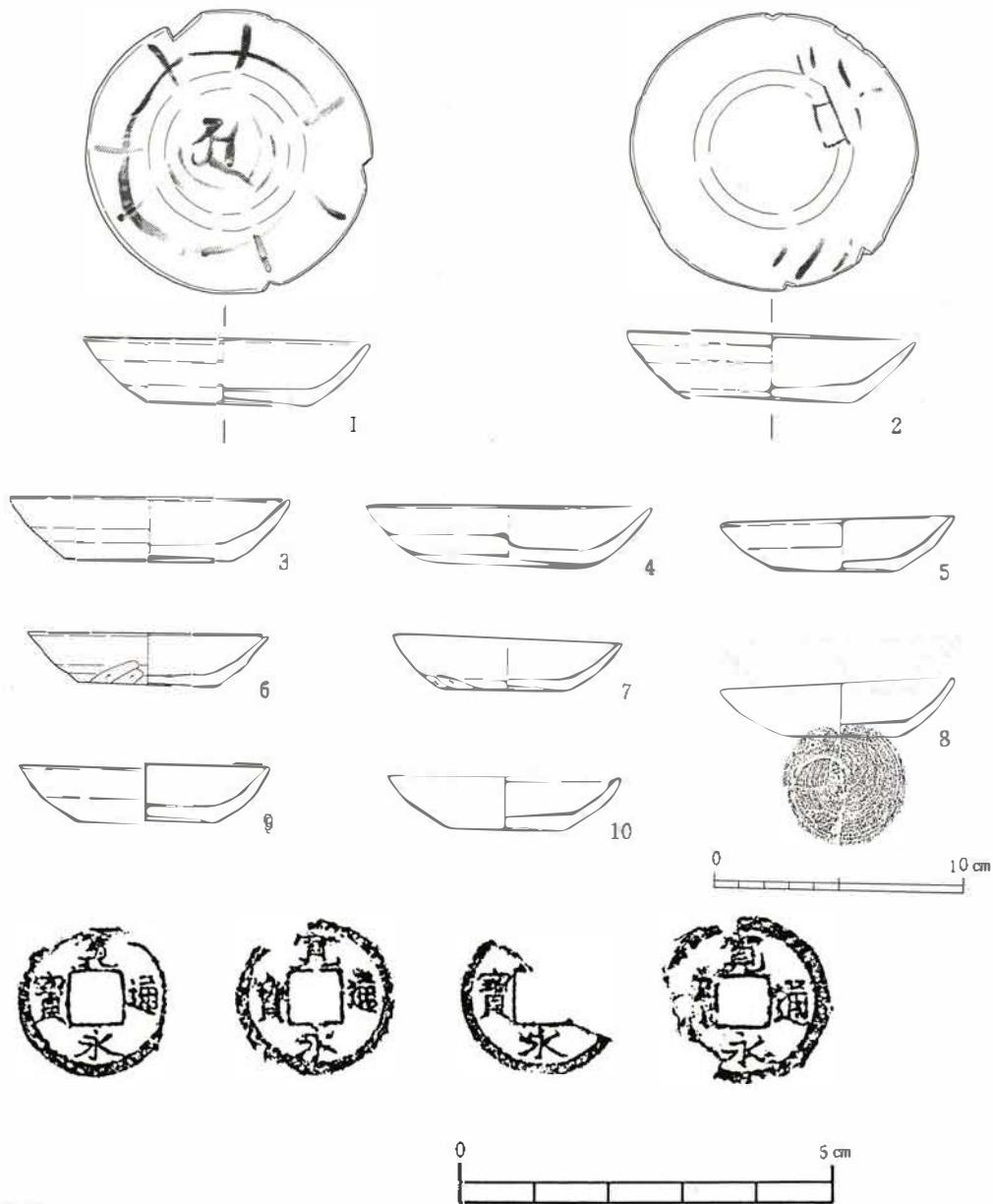
出土遺物としては、SD 212 溝跡から施釉陶器の皿・鉢・擂鉢、染付椀などが比較的多量に出土している。その他、SD 225・226 溝跡からも施釉陶器や白磁、染付などが出土している。

(4) 地鎮遺構

SX 233 地鎮遺構は、調査区中央北端部に位置しており SB 209 建物跡の北廂列から約1m程のところに検出されたものである。遺構は、長さ約60cm幅約35cmの範囲に僅かに窪む不整橿円形状の土壙で、その中からカワラケと古銭が発見されている。カワラケは、僅かに窪む土壙の南北主軸線上に並んで7個体とその列に沿って3個体が出土しており、すべて上向きに置か



第26図 SX 233 地鎮遺構

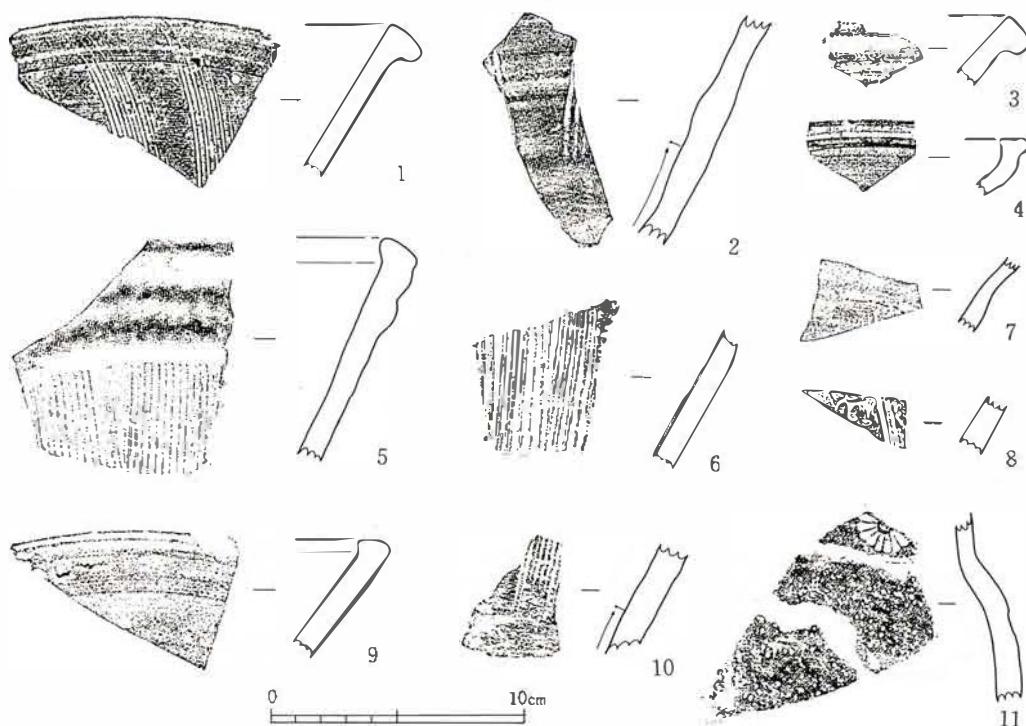


観察表

番号	遺物名	層位	特徴	口径	底径	高さ	登録No
1	カワラケ	I-1	内面に輪宝を焼き、底部に梵字「 山 」の巻齊あり、ロクロ成形	11.5	6.5	2.6	R-78
2		+	内面に墨痕あり、ロクロ成形	11.6	6.6	2.6	R-85
3		+	ロクロ成形、底部回転糸切り	11.3	6.6	2.5	R-82
4		+	シ	11.5	6.4	2.4	R-77
5		+	シ	9.4	4.8	2.0	R-86
6		+	+ 体部下半に手持ちハラケズリ	9.7	5.5	2.0	R-79
7		シ	シ	9.2	5.0	2.0	R-81
8		シ	シ 底部回転糸切り	9.4	4.6	2.1	R-83
9		+	シ	10.0	5.4	2.2	R-84
10		シ	シ	9.3	4.6	2.1	R-80

第27図 SX 233地鎮遺構出土遺物

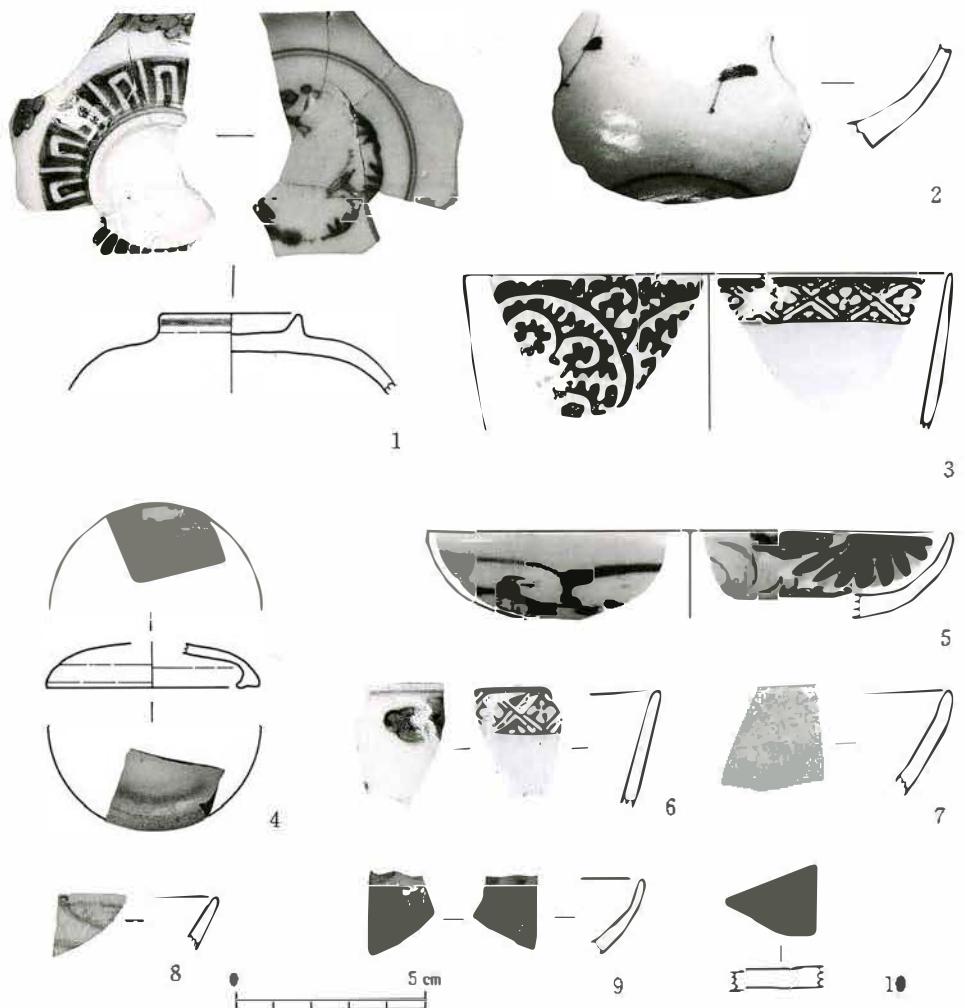
れている。主軸線の方位は N21° Wである。カワラケのほとんどは口縁部を接するように並んでいるが、重なっているものも1個体みられた。また、10個体のカワラケのうち北から2番目と南から2番目の列から外れたものの2個体に墨書きが認められた。古銭は、7点出土している。土壌の北東部に4個重なり合った状態で出土した他にカワラケの間からも2点出土している。古銭は、すべて寛永通宝であり、北東部で重なって出土した古銭に薄い紙のような付着物が認められたことから、和紙か薄い布のようなものに包まれて埋納されていたものと思われる。



観察表

番号	遺物名	遺構・層位	特徴	産地	年代	登録No.
1	施釉陶器擂鉢	L - 3	内外面に鉄釉、6条1単位の櫛目	-	-	R-126
2	施釉陶器擂鉢	L - 3	内面に鉄釉	-	-	R-134
3	施釉陶器擂鉢	L - 1	内外面に鉄釉	-	-	R-127
4	施釉陶器 鉢	L - 1	◆	-	-	R-119
5	施釉陶器擂鉢	L - 1	◆	-	-	R-128
6	施釉陶器擂鉢	L - 1	◆	-	-	R-106
7	施釉陶器擂鉢	L - 1	◆	-	-	R-120
8	施釉陶器擂鉢	L - 3	◆	-	-	R-131
9	施釉陶器擂鉢	L - 1	内面と外面口縁部に鉄釉	-	-	R-129
10	無釉陶器擂鉢	L - 3	色調内外面とも赤褐色	-	-	R-132
11	瓦質土器火鉢	L - 3	外面に菊花文の押印文様あり	-	-	R-135

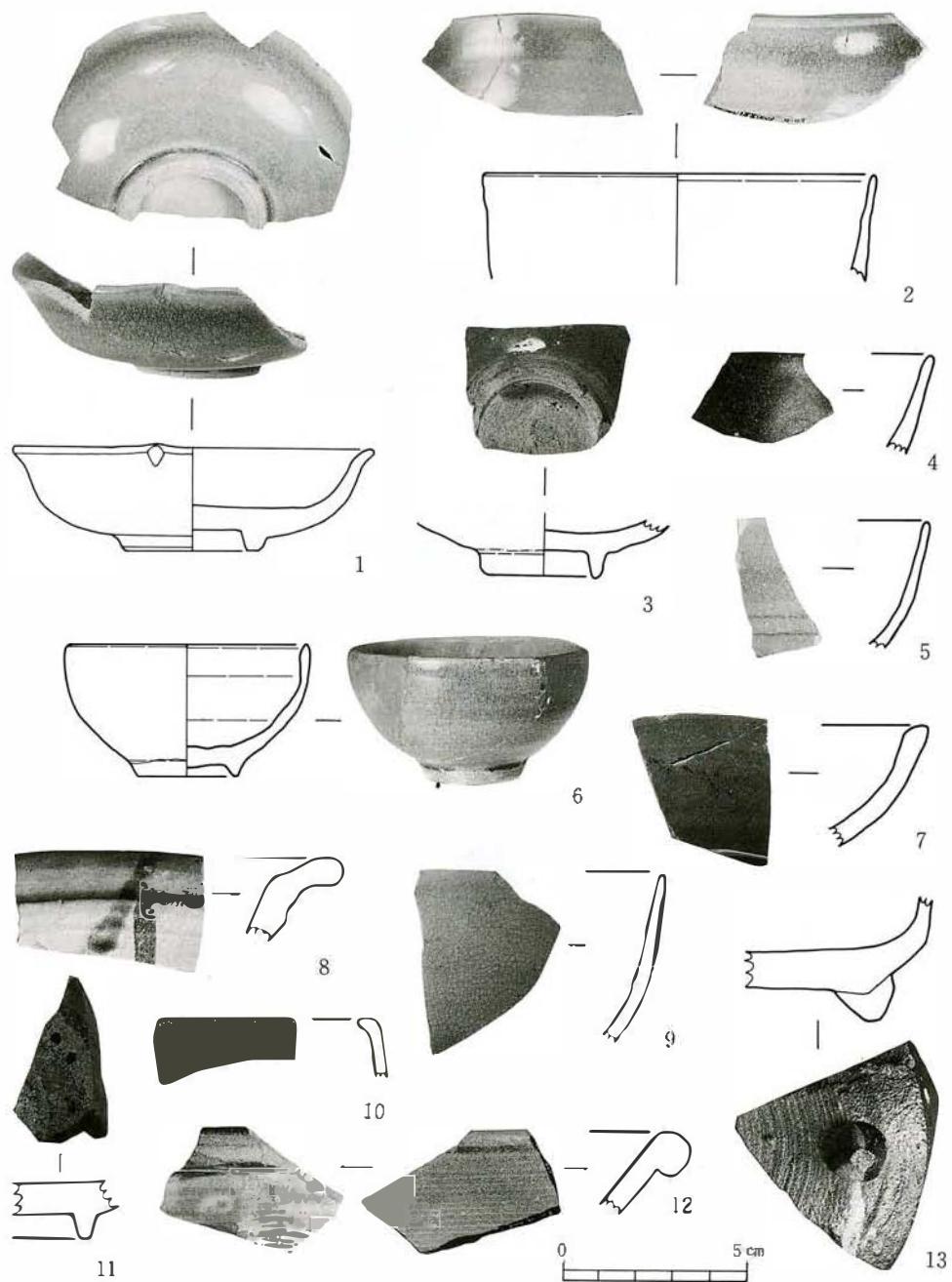
第28図 堆積層出土遺物



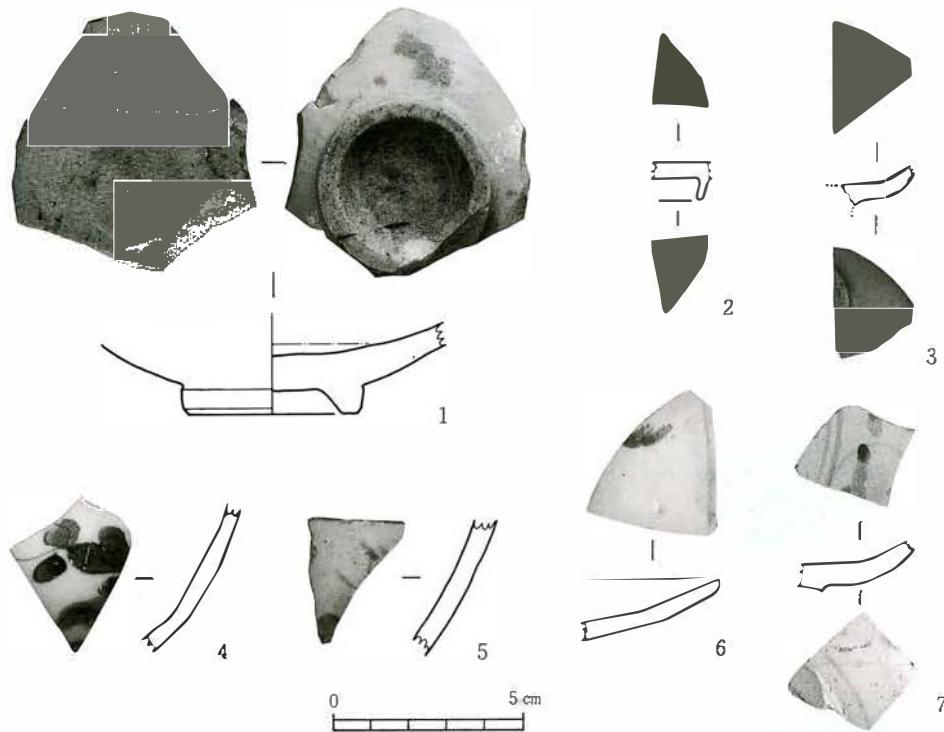
観察表

番号	遺物名	遺構・層位	特徴	産地	年代	登録No.
1	染付 蓋	L-1	内面に松竹梅の円形文	伊万里	18C中 ～末	R-144
2	染付 梶	L-1	外面上に文様あり	々	々	R-149
3	染付 梶	L-1	外面上にたこ唐草文、内面口縁部に四方ダスキ文	々	々	R-147
4	染付 盒子蓋	L-1	外面上に赤色と緑色の焼き付け文様あり	—	—	R-150
5	染付 皿	L-1	外面上に唐草文、内面に墨書きの文様あり第32図-1と同一旧体か?	伊万里	—	R-139
6	染付	L-1	内外面上に文様あり	々	—	R-145
7	染付 梶	L-1	外面上に文様あり	—	—	R-158
8	染付 梶	L-1	外面上に文様あり	—	—	R-156
9	染付 皿	L-1	口縁を輪花にし、内面を丸ノミで花弁状に彫っている。	—	—	R-142
10	染付 皿	L-1	内面底部に文様あり	—	—	R-157

第29図 堆積層出土遺物



第30図 堆積層出土遺物



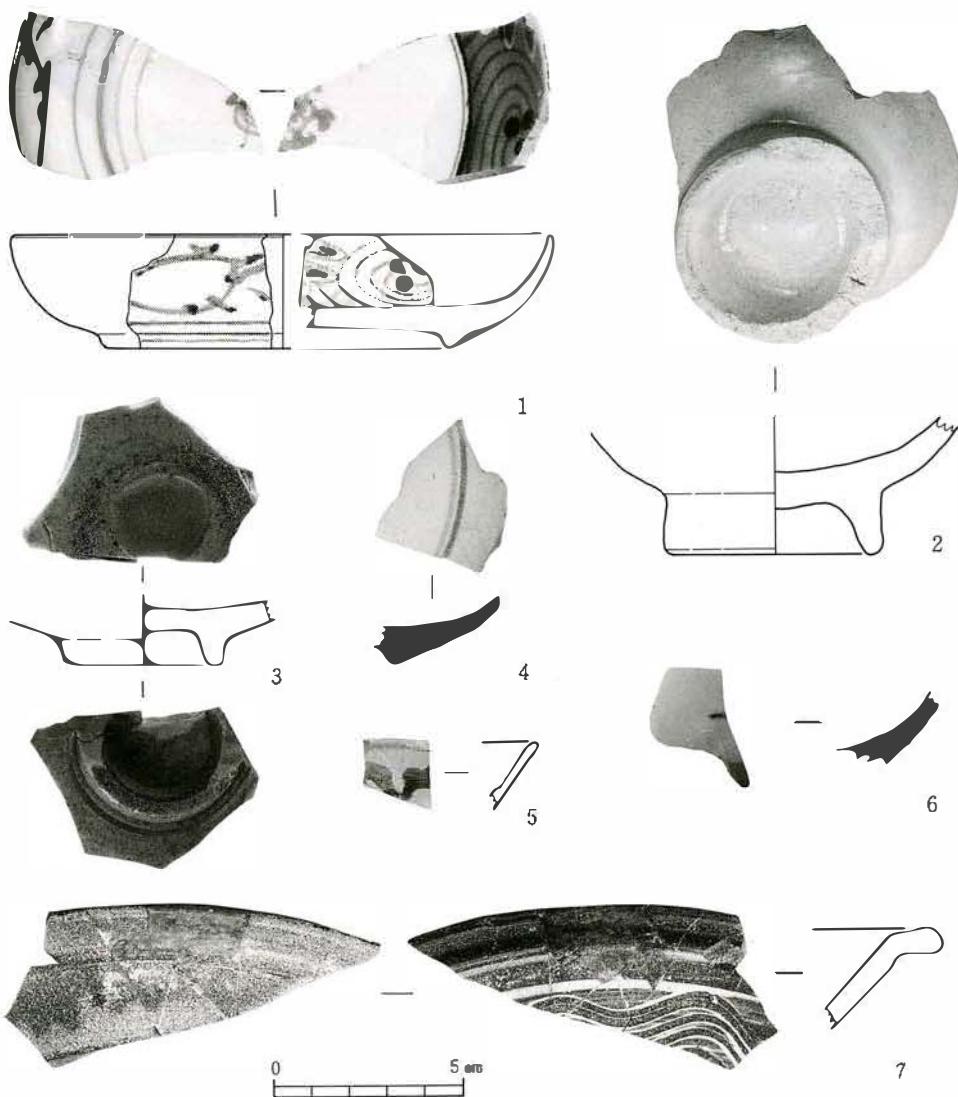
観察表（第30図）

番号	遺物名	遺構・層位	特徴	産地	年代	登録No.
1	施釉陶器 盆	L - 1	口縁部輪花(五弁)、内面と外面体部に灰釉	柏原大廈	-	R-114
2	施釉陶器 梗	L - 1	内外面に灰釉	々	-	R-113
3	施釉陶器 梗	L - 1	内面と外面体部に灰釉	々	-	R-107
4	施釉陶器 梗	L - 1	内外面に鐵釉	々	-	R-115
5	施釉陶器 梗	L - 1	内外面に灰釉、外周体部に2段に環線	々	-	R-104
6	施釉陶器 杯	L - 1	内面と外面体部に灰釉	々	-	R-112
7	施釉陶器 盆	L - 1	内外面に灰釉	々	-	R-108
8	施釉陶器 鉢	L - 1	内面口縁部に銀綠釉の流し掛け、内面に鐵繪文様、笠原鉢	美濃	17C中～18初	R-103
9	施釉陶器 梗	L - 1	内外面に灰釉	々	-	R-124
10	施釉陶器 香炉	L - 1	外面と内面口縁部に灰釉	—	-	R-116
11	施釉陶器 梗	L - 1	内外面に灰釉、内面に蛇の目釉割ぎ	—	-	R-117
12	施釉陶器 鉢	L - 1	内外に白土を刷毛塗り、内面に横目、外面に横による波状文	唐津	-	R-122
13	施釉陶器 香炉	L - 1	内面と外面底部に鐵釉、外面底部に糸切り痕、円錐状の脚あり	—	-	R-110

観察表（第31図）

番号	遺物名	遺構・層位	特徴	産地	年代	登録No.
1	白磁 盆	L - 1	内面蛇の目割ぎ、高台無釉	伊万里	18C中～末	R-137
2	染付 梗	L - 1	内面底部に鉢款	々	-	R-138
3	染付 杯	L - 1	内外面に文様あり、台部剥離痕あり	々	-	R-141
4	染付 梗	L - 1	外面に文様あり	々	-	R-148
5	染付 盆	L - 1	内面に文様あり	々	-	R-153
6	染付 盆	L - 1	外面に文様あり	平清水?	-	R-148
7	染付 梗	L - 1	内外面に文様あり	—	-	R-140

第31図 堆積層出土遺物



観察表

番号	遺物名	遺構・層位	特徴	產地	年代	登録No.
1	染付皿	L-2	内面底部にコンニヤク印判五弁花文、内面に墨書きの文様あり。 外面上に唐草文あり。	伊万里	17世紀後半	R-151
2	施釉陶器	碗	内外面に灰釉	—	—	R-123
3	白磁皿	L-3	内面蛇の目釉剥ぎ、高台無釉	伊万里	18C中期～末	R-154
4	染付皿	L-3	内面底部に二重圈線、高台端部は無釉	—	—	R-143
5	染付皿	L-3	内面に文様あり	—	—	S-155
6	染付皿	L-2	外面上に文様あり	—	—	R-152
7	施釉陶器	鉢	内面に棒による波状文、白土化粧	唐津	—	R-121

第32図 堆積層出土遺物

V 考 察

本調査は、中央公園計画地の中で施設がかかることによって削平される西側丘陵部の平坦部分を対象として実施したものである。しかし、この丘陵は南側に延びて南西方向に緩やかに傾斜しており、遺跡も南方へ広く分布しているため、今回の調査だけで遺跡の全体像を明らかにすることは出来ない。このことを前提として、本調査で検出された遺構の性格および年代について検討を加える。

1 古代の遺構について

古代の遺構は、掘立柱建物跡2棟、土壙2基それに合口甕棺1基である。掘立柱建物跡は、丘陵平坦部と東側斜面の一段低くなったところから検出された。平坦部の南東隅からみつかったSB 201建物跡は、桁行4間梁行2間の南北棟建物であり、柱間寸法は、桁行10尺梁行8尺5寸見当でつくられたものと思われる。また、柱穴は一辺約1m前後の方形または長方形を呈することから、この建物跡は大規模な掘立柱建物跡と考えられる。SB 202建物跡は、丘陵平坦部と約80~100cmの比高差をもつ丘陵東斜面から検出されたものであるが、3基の柱穴の深さが100~120cmを有することから、丘陵東斜面の段は古代に造り出されたものであると考えられる。柱穴の規模は、一辺90~110cmの方形を呈し、柱の径も28~30cmを有することからSB 202建物跡も大規模な建物跡の様相を有していると思われる。

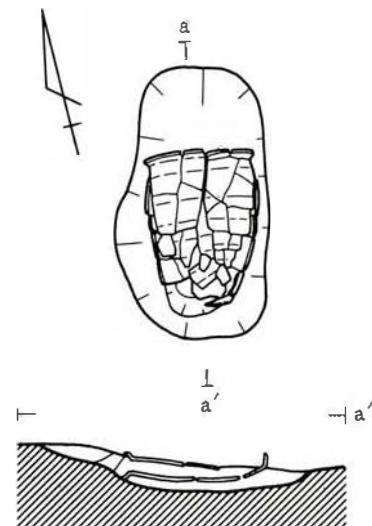
多賀城跡の周辺部における大規模な建物跡の検出例としては、この丘陵の北方約300mに位置する館前遺跡とその西にある市川橋遺跡の大臣宮地区の建物跡がある。館前遺跡からは、6棟の建物跡が検出されており、大臣宮地区からは2棟の建物跡が検出されている。いずれも9世紀代の国司の館跡と考えられ、両者の主要な建物の方位が北で東へ偏する外郭南辺築地の方向をもつなどの共通性を有している。⁴⁾ 本調査で検出されたSB 201・202建物跡は、柱穴の規模や柱間寸法などの点で館前遺跡に匹敵する規模を有している。しかし、建物の方向はSB 201建物跡がN10°W、SB 202建物跡はN21°Wをもつことから、いずれも館前遺跡や大臣宮の建物とは異なる方向をもつものである。

一方、本調査区の東方約200mの丘陵上には多賀城の付属寺院である多賀城廃寺跡があり、出土遺物として瓦が多く出土していることも併せて考えると、今回検出された2棟の建物跡は、多賀城廃寺跡に関連する遺構とみるのが自然であると思われる。しかし、この2棟の建物は寺院伽藍の方向とも合致しないことから、直接的に廃寺跡と結び付けるにはいささか疑問がある。このことについては、寺域の範囲が不明であることと関連する問題でもあり、古代の遺構が極めて希薄な状況からすれば、本調査区までは寺域が及んでいないものと思われる。この点に關し

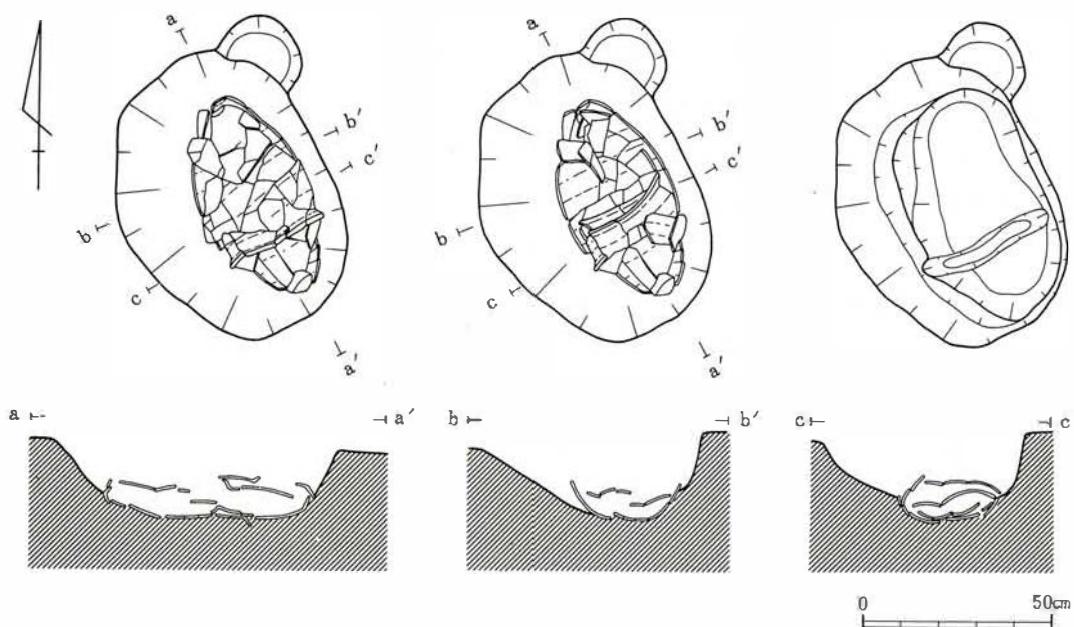
では、今後の調査により明らかになるものと考えられる。建物跡の年代については、少量の瓦と須恵器片のみであり確定できないが、土壙から出土した多量の瓦、須恵器から8世紀に遡る可能性を指摘しておきたい。

合口甕棺については、調査区の北西部で1基検出されている。さらに、本遺跡からは二ヵ所で甕棺が検出されている。⁵⁾本調査区の南方約250mの井戸尻地区の丘陵端部から検出された甕棺は、長胴形2個体を使った合口甕棺で、長さ76cm、幅55cm、深さ23cmの土壙内に埋設されている。また、井戸尻地区の南方200mの表地区の丘陵南端部からは、長さ73cm、幅40cmの土壙内に長胴甕1個体が横位に埋葬された状態で発見されている。

本遺跡から発見された三例の甕棺の年代は、概ね平安時代前半頃のものと考えられる。



第33図 表地区埋甕



第34図 高崎遺跡井戸尻地区合口甕棺

2 近世の遺構について

近世の遺構としては、掘立柱建物跡8棟、土壙9基、溝跡8条そして地鎮遺構1基が検出されている。掘立柱建物跡は、調査区中央部から北側に3棟、東側に4棟、西側に1棟が配置されている。北側の3棟は規模が大きく、東側と西側のものは小規模である。最北に位置するSB 209建物跡は、桁行5間、梁行1間の東西棟で北側に3間の廂を付けたもので、最も規模が大きいことから母屋の建物跡とみられる。SB 207・208建物跡とSB 205・206建物跡そしてSB 203・204建物跡は、それぞれ重複関係をもっており、おそらく付属舎としての建物の性格は変わることなく建替えされたものと思われる。建物跡の方位と柱穴の規模から、SB 203・205・208建物跡が同時期に存在したものと考えられ、その後SB 204・206・207に建替えされたのであろう。

これらの建物の年代については、建物跡の柱穴及び柱穴とみられる小ピットから出土した遺物から検討する。遺物には磁器の椀・皿と陶器の鉢・擂鉢・椀・片口などがみられる。この中で年代がわかるものとしては、外面にたこ唐草文、内面底部に松竹梅の円形文を施した染付椀がある。これは伊万里焼で18世紀中葉から末葉に位置づけられている。⁶⁾また、染付皿や椀の大部分は伊万里焼のものである。陶器では、内面に白土刷毛塗りによる文様をもつ唐津焼の鉢や外面の上半部に灰釉、下半部に鉄釉を掛け分けた相馬大堀焼の椀がある。前者は17世紀後葉から18世紀にわたるものであり、後者は18世紀後葉に属するとみられる。これらの遺物から建物跡の年代については、18世紀中葉以降の年代が与えられる。

さらに、土壙や溝跡からもこの屋敷の人々が使用した陶磁器類が出土している他に、堆積層からも多量の遺物が出土しており、屋敷の年代を考える資料として簡潔に触れておきたい。

SK 217 土壙からは遺物がまとまって出土している。土壙の下方から全面に鉄釉をかけた擂鉢、脚の付け根に獅子あるいは狛犬の立体的な顔面装飾が付けられた火鉢とともに灰釉の椀が出土した。この椀は相馬大堀焼である。土壙の上方からは体部の内外面に鉄釉がかけられた灯明皿と鉄錆釉が塗られた土鍋もみつかっている。また、SK 216 土壙からも陶器の香炉や擂鉢とともに相馬大堀焼の灰釉椀が出土している。SK 219 土壙からは、相馬大堀焼の椀と内面蛇の釉剥ぎを呈する白磁皿が共伴しており、後者は伊万里焼で18世紀後葉の年代が与えられている。

溝跡では、SD 212 溝跡から伊万里焼の染付椀と相馬大堀焼の土瓶が出土している。また、SD 226 溝跡からも伊万里焼の染付皿が出土している。

さらに、堆積層からも多種類の遺物が出土している。第29図の1は、内面に松竹梅の内形文がある染付蓋であり、3は外面にたこ唐草文、内面の口縁部に四方ダスキン文のある椀である。また、5は内面に墨弾きの文様があり、同じ文様をもつ第32図の1と同一個体と思われる。こ

の第32図1の染付皿は、内面底部中央にコンニャク印判による五弁花文があり、17世紀後葉以降の年代が与えられているが、これ以外の伊万里焼は18世紀中葉以降のものが大部分を占めている。この他、産地がわかるものでは第30図1が口縁部に輪花（5弁）の痕跡がある陶器皿で、相馬大堀焼である。また第30図8は美濃焼の鉢、12は唐津焼の鉢である。

近世の遺構の中で特筆すべきものに地鎮遺構がある。この遺構は、カワラケと古銭を浅い土壙に埋納したもので、その状況は前に詳しく述べたが、墨書きされたカワラケの1つに輪宝を描いたとみられる墨の痕跡が認められた。墨書きは、口縁部と見込みに三つの圈線を描き、それらの中心に梵字の孔（ア）字が描かれている。また、口縁部から見込みに向けて八条の線がほぼ等間隔に描かれている。この遺構は、屋敷の中で執り行われた地鎮の遺構と考えられる。このことについては、『修驗常用秘法集』という書物の中の「地鎮祭法」の項に、「輪宝の中孔字之れを書く。是れも紙にて切るなり、土器の内に是の如く輪宝を書き、粥の五穀を少し入れよ。また土器に孔字を書き、蓋を覆ひて之れを埋むべし。堂塔社相の地鎮は中央に之を埋むべし。人の屋敷には四壁の内、氏神の祠の下に埋むべし。またその館の内に社なくんば戌亥の角の柱の下に埋むべし。」と記されている。⁹⁾ 調査で発見されたこの地鎮遺構は、屋敷の建物の中で規模が大きいSB209建物跡の北西隅柱に近接する場所に位置しており、この記述と一致している。

最後にこの屋敷について述べることにしたい。今回の調査で発見された遺物の中で、最も古いものに、17世紀中期頃まで遡る陶器があるが、数は極めて少なく大部分のものは18世紀代のものである。また、屋敷の創建にかかる地鎮遺構は、共伴した寛永通宝のうちで最も新しいものが元文4年（1739）の鋳造銭であることなどから、この屋敷の年代は、およそ18世紀以降と考えられる。

また、屋敷についての記録として、安永3年（1774）の「高崎村風土記御用書出」の中に13の屋敷があったことが記されており、そのうちの一つに「弥勒屋敷」がある。今回調査した丘陵を「弥勒山」と称していたことから、調査で発見した屋敷が「弥勒屋敷」である可能性が極めて高いと考えられる。

近世建物跡一覧

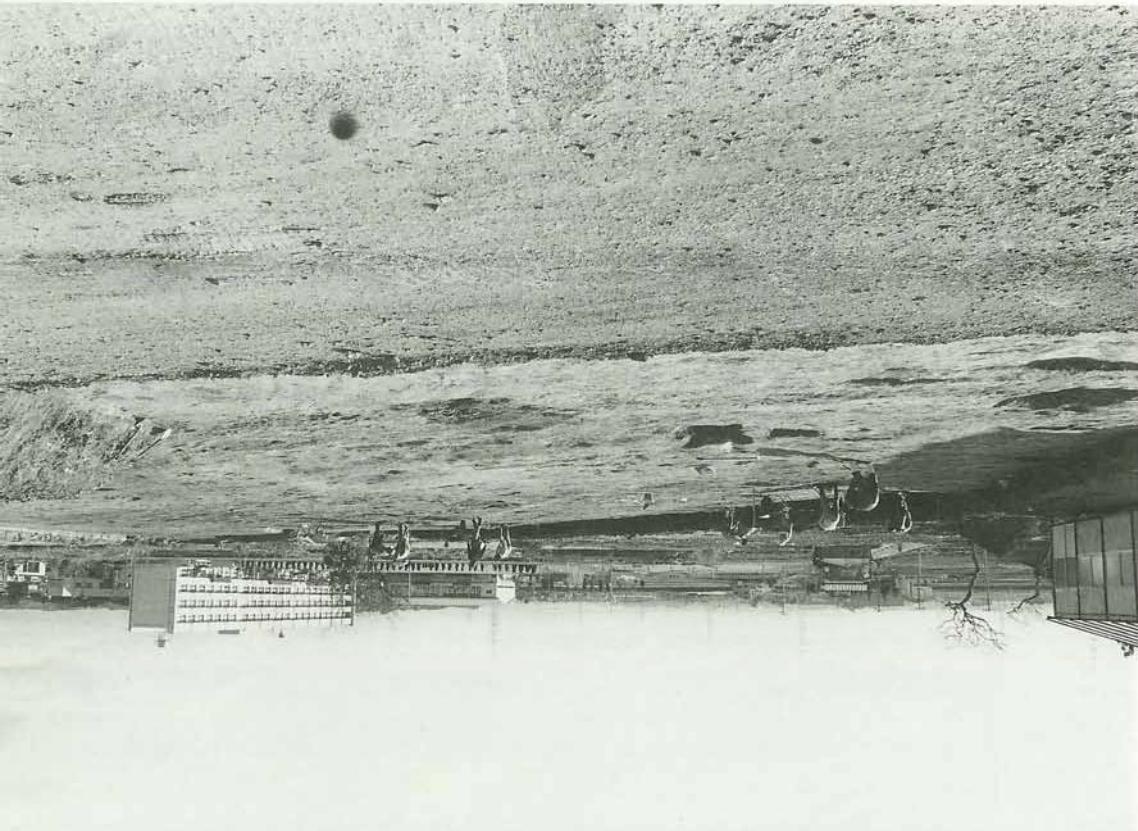
遺構名	規 模	形 態	方 向
SB203	3間×1間	東西棟	北側柱列 E12°N・南側柱列 E13°N
SB204	3間×1間	南北棟	西側柱列 N28°W・東側柱列 N18°W
SB205	3間×1間	東西棟	北側柱列 E17°N・南側柱列 E15°N
SB206	3間×2間	南北棟	西側柱列 N20°W・東側柱列 N20°W
SB207	4間×1間	東西棟	北側柱列 E22°N・南側柱列 E22°N
SB208	2間×2間	南北棟	西側柱列 N24°W・東側柱列 E21°W
SB209	5間×1間	東西棟	北側柱列 E21°N・南側柱列 E21°N
SB210	3間×1間	東西棟	北側柱列 E33°N・南側柱列 E33°N

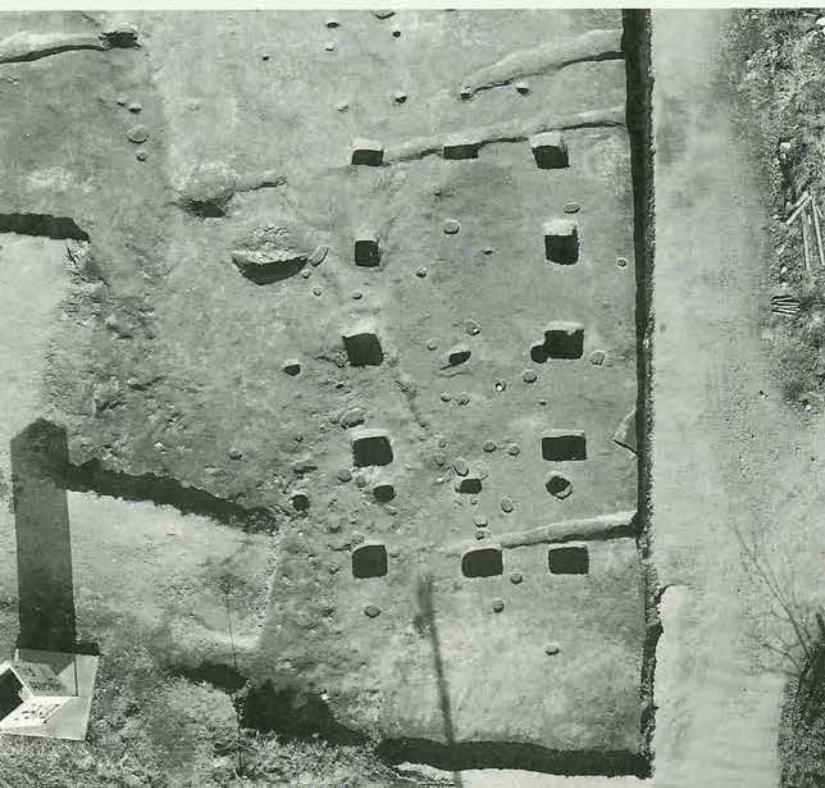
註

- 1) 『志引遺跡発掘調査報告書』多賀城市・多賀城市教育委員会 1984年
- 2) 加藤孝・辺見端「宮城県多賀城市東北学院古墳発掘調査速報」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第13集 1982年
- 3) 『年報1』多賀城市教育委員会 1987年
- 4) 『市川橋遺跡調査報告書』多賀城市教育委員会 1984年
- 5) 『高崎遺跡』多賀城市教育委員会 1986年・1987年
- 6) 『古伊万里』別冊太陽№63 平凡社 1988年
- 7) 6)と同じ
- 8) 近世の地鎮遺構については、『古代研究28、29 特集地鎮・鎮壇』元興寺文化財研究所 1984年を参考にした。
- 9) 同上の文献に所載の水野正好「近世の地鎮・鎮壇」に紹介されている。
- 10) 調査地の周辺は、小字名が「弥勒」であり「弥勒坂」や「弥勒谷地」などこの地の人々に呼び名が伝わっている。「弥勒山」は調査地の丘陵を指すという。高崎在住の鈴木和夫氏より教示。

图版 1

下 兼城郡春昌邑（单木村）
上 龟尾区道崇（西上空村）



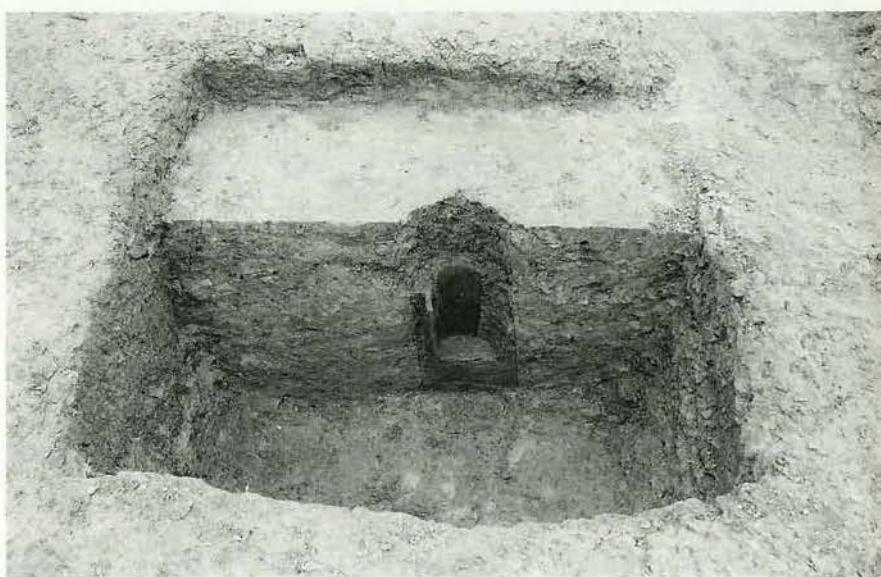


上 遺構全景

下 SB 201 建物跡



上 SB 201 建物跡



中 SB 201 建物跡

No. 7 柱穴

柱痕跡内から

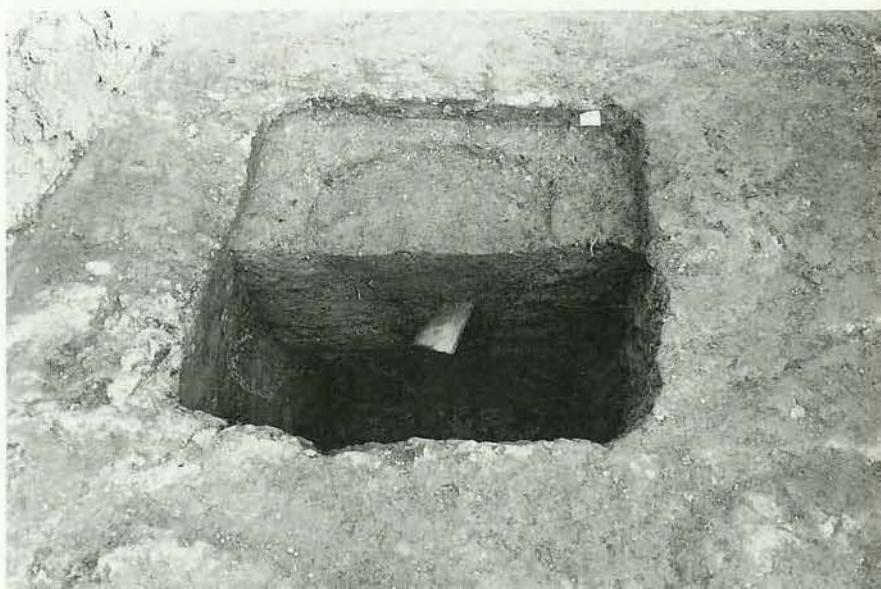
丸瓦が出土している

下 SB 202 建物跡

No. 3 柱穴

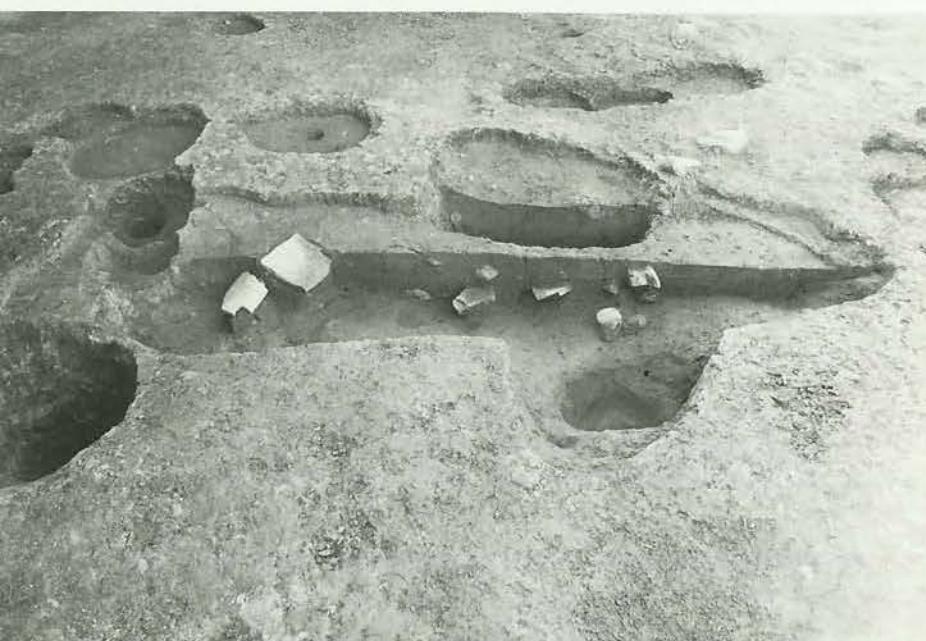
柱切り取り穴から

平瓦が出土している

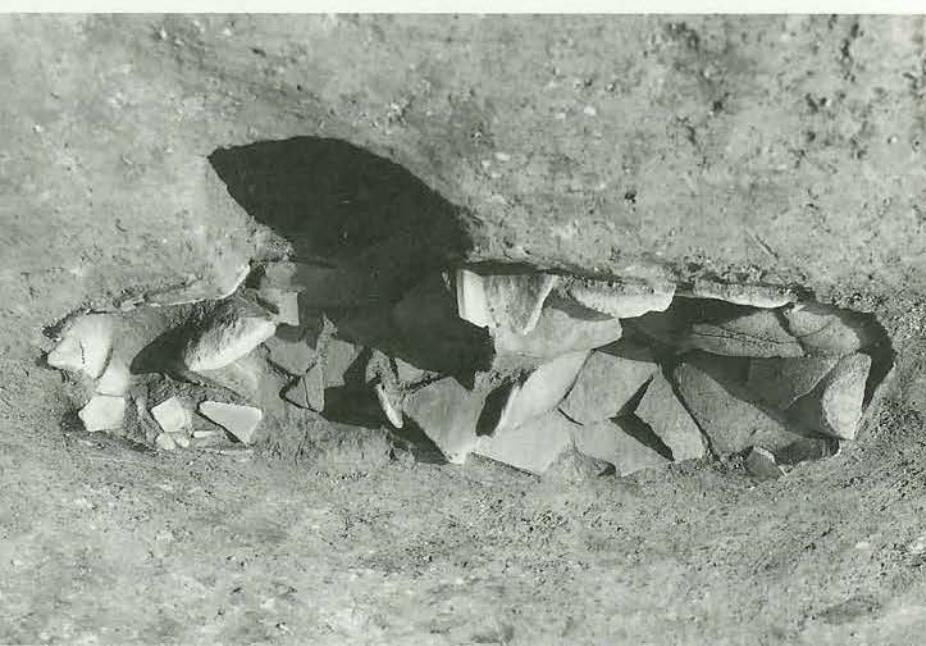




SK 213 土壙
石の間から瓦が
出土している



SK 215 土壙
瓦出土状況



SX 211 合口壺棺
検出状況

高崎遺跡第4次調査報告

調査要項

1. 所在地：多賀城市高崎二丁目165番地
2. 調査期間：
昭和60年6月20日～6月25日（試掘調査）
昭和60年7月19日～8月10日（本調査）
3. 調査面積：600m²
4. 調査主体：多賀城市教育委員会
5. 調査担当：
社会教育課文化財保護係
（試掘調査）滝口 卓
（本調査）石川俊英・相沢清利
6. 調査協力：曾我庄一郎

I 調査に至る経緯と経過

昭和60年4月、地権者から宅地造成の計画が提示されたため本件開発計画について協議を行った。申請地は、特別史跡多賀城廃寺跡の指定地域の西側に隣接する丘陵南斜面に当たり、寺跡に関連する遺構・遺物の存在が充分予想された。地権者との協議の結果、発掘調査に対する同意が得られたため昭和60年6月に遺構・遺物の分布状況を把握する目的で試掘調査を実施した。

この試掘調査での成果を踏まえ、同年7月19日から本調査に入った。調査の結果、当該地はかなり削平を受けていたため、当初の予想に反し遺構・遺物が希薄であった。そのため、遺構の平面図作成については平板測量を行い方向は磁北にあわせた。セクション図作成、全景写真撮影を行い調査を終了した。



第1図 調査区位置図

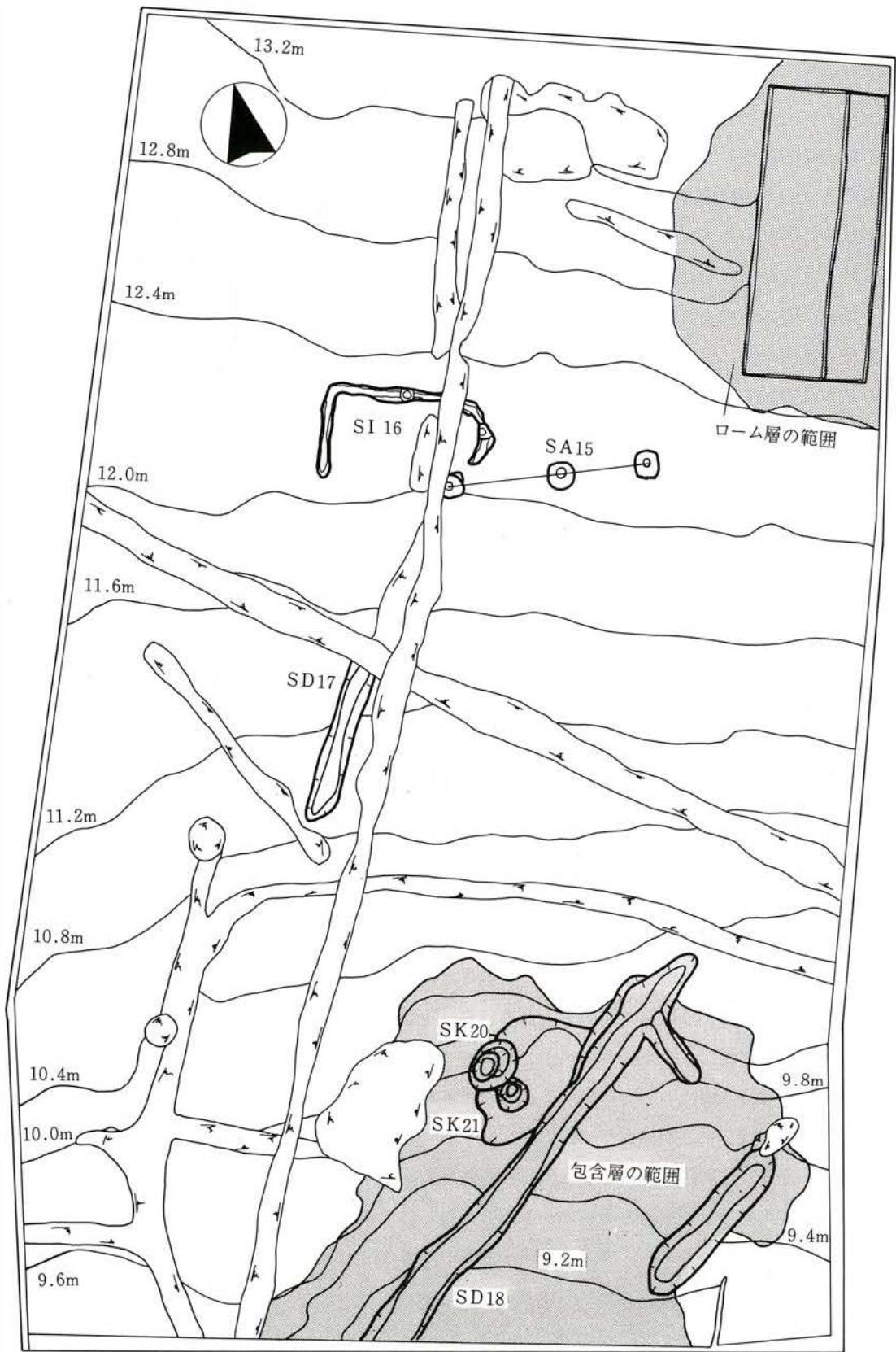
II 発見遺構と遺物

今回の調査によって発見された遺構は、柱列跡1条、竪穴住居跡1棟、溝跡3条、土壙2基である。以下に、主な遺構について記述する。

S A 15 柱列跡：調査区中央部の地山面で検出されたもので、柱穴3基が東西に並んでいる。柱穴の延びについては南側が削平を受けているため不明であるが、建物跡の可能性も考えられる。柱穴は径60~70cm前後の円形を呈している。柱間は東側から1.71m、2.31mで総長4.02mである。柱穴埋土は、にぶい黄橙色土で地山ブロックや粒子を含んでいる。柱の径は検出された柱痕跡から27cm前後の円形を呈するものと思われる。

遺物としては、平瓦が出土している。

S I 16 竪穴住居跡：S A 15 柱列跡の西側地山面で検出された。住店跡は、削平を受けているため北側周溝及び東西の周溝の一部が残存している状況である。規模は東西3.43m、南北1.98mまで検出されている。周溝は幅18cm前後で深さは最大で13cm程である。埋土は粘性のある灰黄色土である。遺物は出土していない。

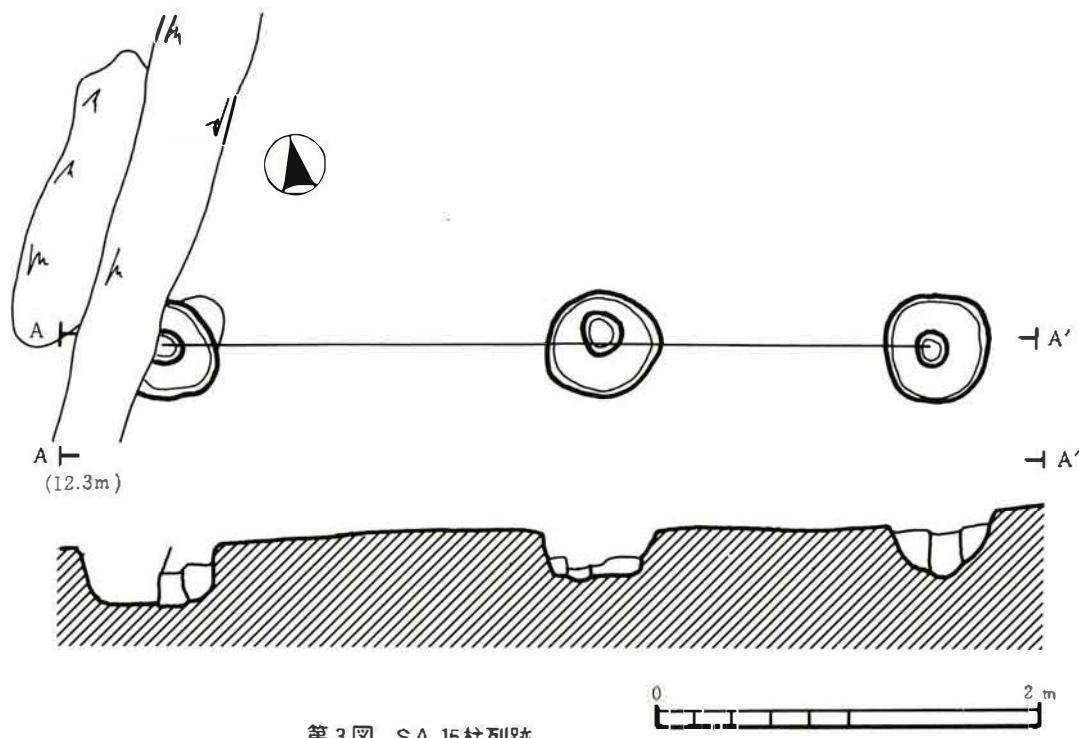


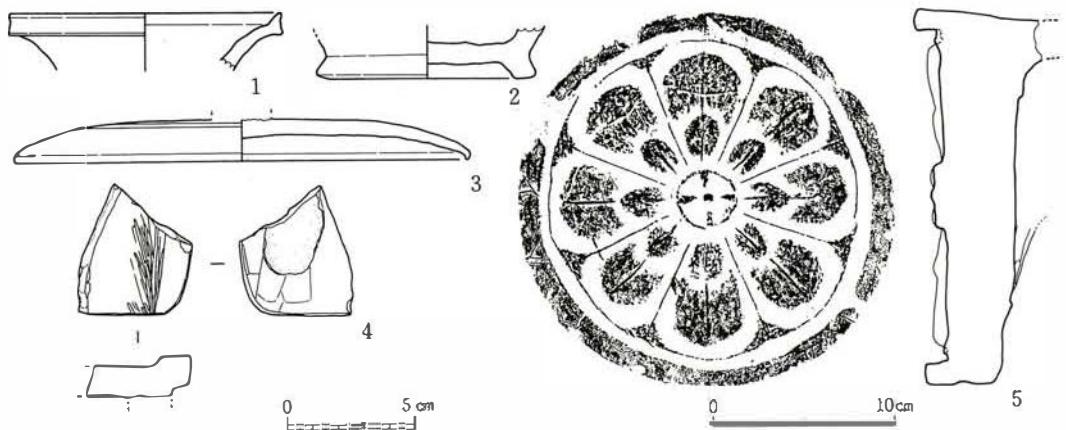
第2図 遺構全体図

III まとめ

高崎遺跡第4次調査区は、多賀城廃寺跡主要伽藍の南西300mの地点であり、この寺跡に関連する遺構が期待されたが、調査の結果は柱列跡1条、竪穴住居跡1棟、溝跡3条、土壙2基を検出したに止まり、明らかに多賀城廃寺跡に関連づけられるような遺構は検出できなかった。調査区の地形は、丘陵南斜面で海拔9~13mにわたる傾斜度10~13°を計り、思ったよりも削平が著しいため遺構の遺存状態も悪く、既に失われた遺構があった可能性も考えられる。

調査区南側の丘陵下方部で検出された遺物包含層から、風字硯や重弁蓮華文軒丸瓦などの瓦類が多く出土している。このことから、廃寺跡に関連する遺構が存在していたか、あるいは隣接するところに存在していることも考えられる。





番号	遺物名	層位	特徴	登録No
1	須恵器 瓶	ℓ-2	口縁部片、内外面ロクロナデ	R-6
2	須恵器 瓶	ℓ-2	底部片、内外面ロクロナデ、回転ヘラケズリ	R-7
3	須恵器 蓋	ℓ-1	つまみ部分欠損、内外面ロクロナデ、回転ヘラケズリ	R-5
4	風字 砥	ℓ-2	脚が付いていた痕跡がある。	R-3
5	軒丸瓦	ℓ-4	重弁連華文	R-12

第4図 遺物包含層出土遺物

図版 1
調査区全景(南より)



図版 2
S A 15 柱列



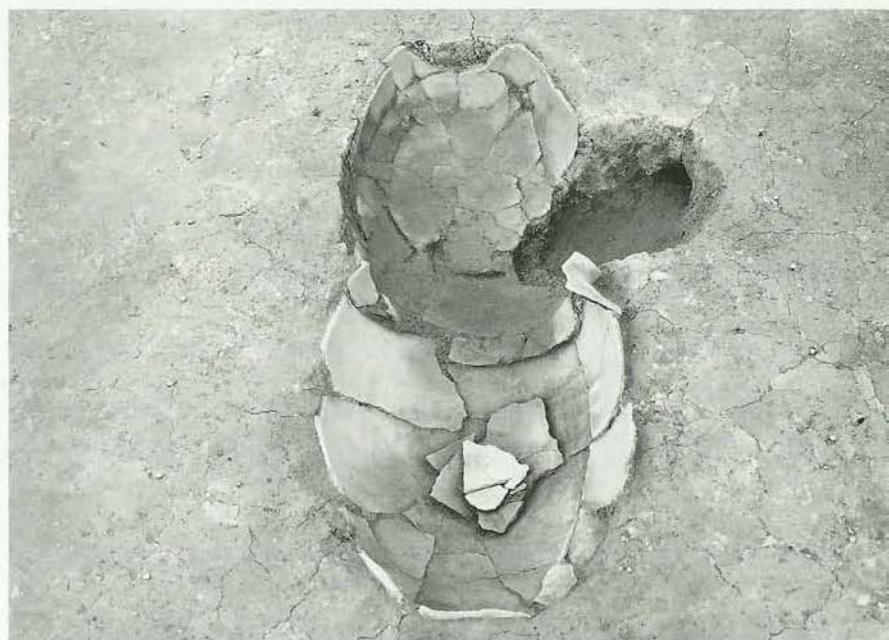
図版 3
S A 15 柱列の柱穴





SX 211 合口甕棺

上部破片を取り
外した状況



同 上 (南より)

北側の甕の口縁部が
南側の甕に入り込ん
でいる



合口甕棺に使わ
れた長胴甕

图版 6

遗物出土状况

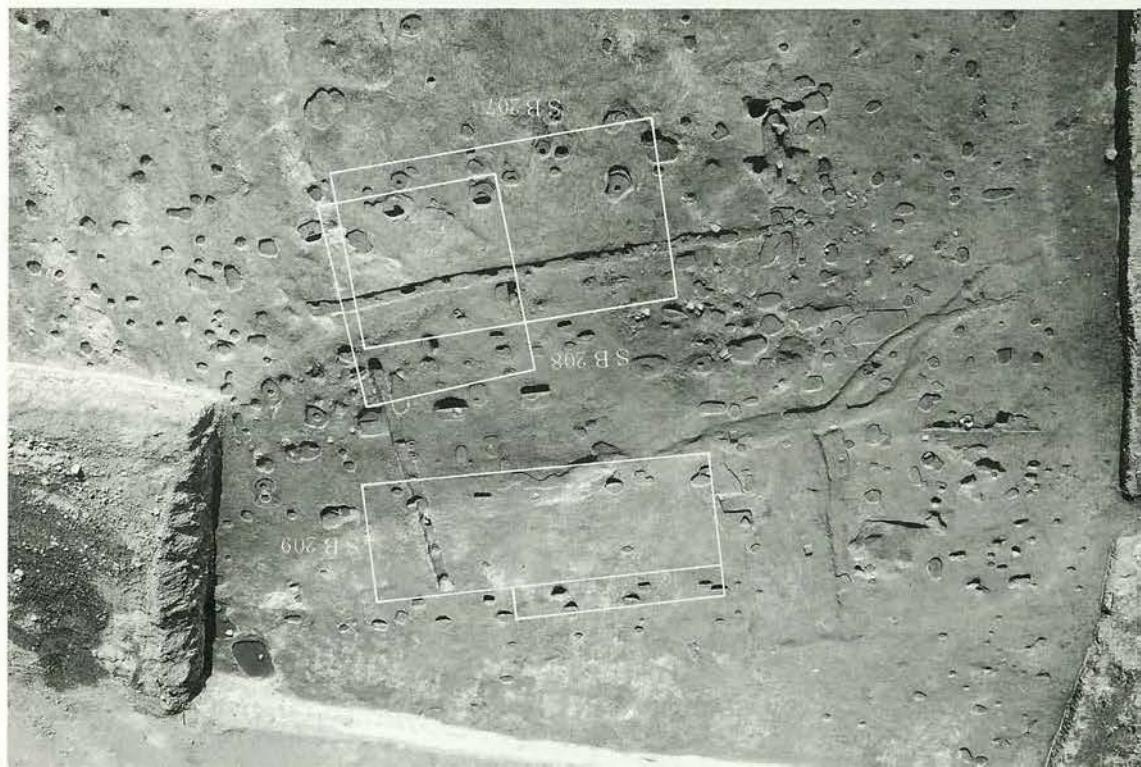
下 SK 217 土砾

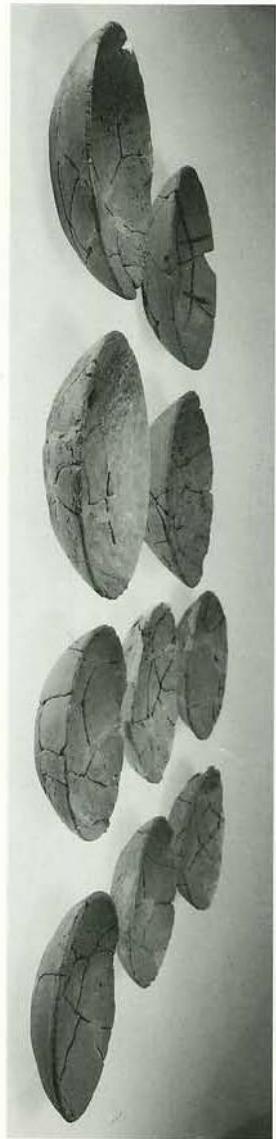
遗物状况

中 SB 203 建物跡

斯基泰区北半部

上 近世遗物

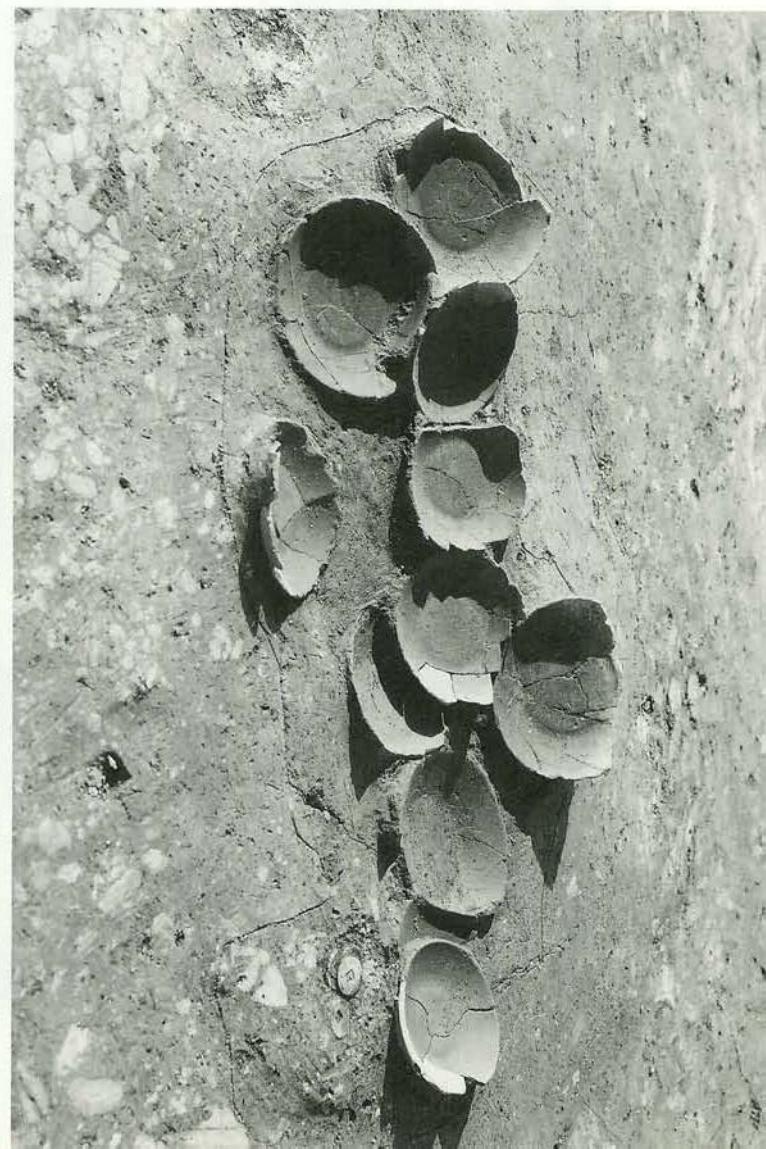


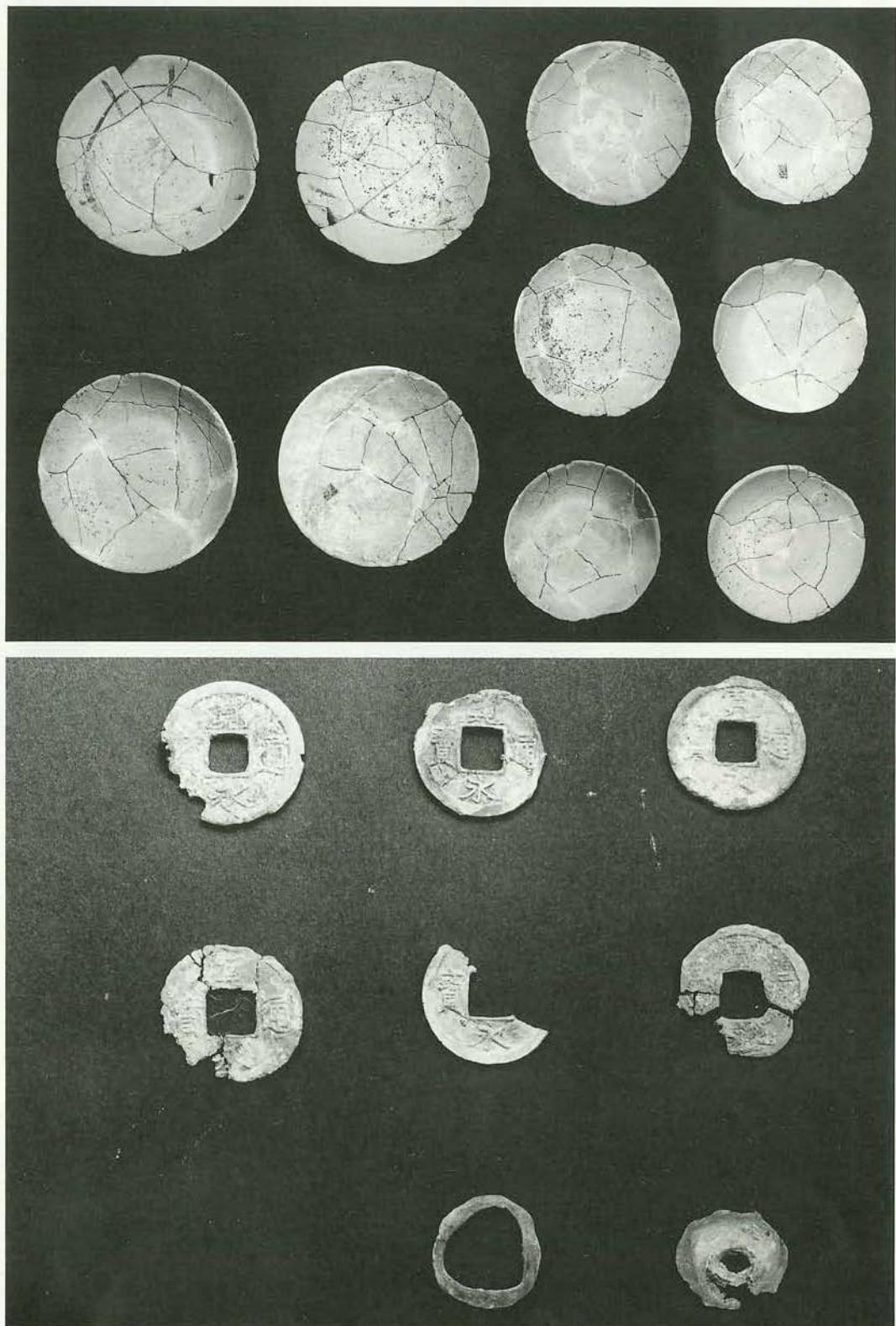


上 SX 2331地鎮遺構
(東より)
カワラケと古銭
が出土している

中 同 上
北端部から古銭
が重なって出土
している

下 SX 2331地鎮遺構
出土カワラケ





図版 8

上 SX 233 地鎮遺構出土カラケ

下 " 古 錢

多賀城市文化財調査報告書第19集

高崎遺跡調査報告書

—中央公園関連調査報告—

平成元年3月31日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
発行 多賀城市中央二丁目27番1号
TEL (022) 368-0134

印刷 有限会社 工 陽 社
塩釜市尾島町8番7号
TEL (022) 365-1151(代)
